

叡山の釋迦堂に安置せられ、藥師如來の像は同じく叡山の根本中堂に安置せられたのであります。○威を現當に施し 現當とは現世と未來とのことで、釋迦藥師の二佛は現世から未來までも利益を興へらるゝものとして尊信せられて居たのであります。○虚空地藏の化を爲す 虚空藏菩薩の像は叡山の中で横川の般若谷に安置せられ、また地藏菩薩の像は横川の戒心谷に安置せられました。化を爲すとは尊信せられて居たことでもあります。○燈燭を明かにし 其の堂塔が榮えて行くやうに保護を加へたことでもあります。○地頭 頼朝が鎌倉に幕府を開いてから諸國に地頭を置いて領主を管轄させました。○教主を忘れて 此の娑婆世界の教主は釋迦牟尼佛であります。此の娑婆世界に生れながら此の教主を忘れて、西方の教主たる阿彌陀佛を頼むといふのは間違つたことなのであります。○西土の佛駄 阿彌陀佛の住せらるゝ極樂世界は西方に在るのであります。○付屬を抛ちて 傳教大師は藥師如來の像を根本中堂に安置し、之を永く崇むるやうに遺命せられました。然るに後に至つて誰も藥師如來を尊ばなくなつたのは傳教大師の付屬を無視するものと申さなければならぬことでもあります。○東方の如來 藥師如來は東方淨瑠璃世界の教主であります。○四卷三部の經典 無量壽經二卷、觀無量壽經一卷、阿彌陀經一卷でありますから、淨土の三部經は四卷となります。○一代五時の妙典 法華經等の大乘の經典のことでもあります。前に申した通り佛の五時に亘つての說法が皆經典となつて今に傳はつて居るので、之を妙典と申すのであります。○供佛の志を止め 阿彌陀如來より以外の佛には誰も供養をせぬやうになつたのであります。○施僧の懐を忘る 念佛を唱へぬ僧には誰も布施をしないやうになりました。○瓦松の煙老い 屋根の瓦の間に生えた草が松の木のやうに大きくなつたといふのは、佛堂の荒れ果てた形容であります。○護惜の心を捨て 彌陀以外の佛が尊信されなくなつても誰も惜しいと思ふものも無くなつたのであります。○建立の思を廢す 彌陀以外の佛を安置してある堂が破れても、建立しやうとする人もないのであります。○住持の聖僧 念佛を唱へぬ寺には寄附をする人もなくなつたから、住持の僧も居なくなつてしまふのであります。

前にあるやうな事情で淨土宗のみが非常に盛んになつて、其の他の各宗は盡く之に勢力を奪はれ、阿彌陀佛以外の佛に歸依するものは殆んど無くなりましたので、日蓮聖人は其の弊を論じて居られるのであります。其の例として叡山のことを擧げられてありますが、是れはたゞ日本に於

ける各宗の代表として叡山のことを擧げられたので、日本全體の佛教の衰微を救はなければならぬといふのが聖人の御精神であると解すべきであります。『直道を忘る』といひ『邪信を催す』といふのは要するに釋尊の御本意に背いた教へが勢力を有するやうになつたことで、譬へば心の持ち方の間違つた人は、たとひ身體のみが健全であつても人としての役に立たぬと同様に、釋尊の御本意が失はれてしまへば、佛教がたゞ形式の上に於て盛大に見えても、實際何の役にも立たないのであります。聖人は之を深く歎いて居らるゝのであります。

此處に釋迦藥師等の諸佛及び虚空地藏等の諸菩薩の徳を稱ふるのに『威を現當に施し』とあり、また『益を生後に蒙らしむ』とあるのに注意しなければなりません。實際吾々が佛教を信じますれば、其の利益は現世から來世にまで及ぶのであります。これは前にも申したことであります。互ひに佛の貴い教へを信じて修行を勵みますと、心中に勢力を張つて居た煩惱が次第に滅びて、佛性が次第に其の光りを發するやうになります。斯うなれば互ひに小さい自己の利益得失のみに執著して、争ひあひ奪ひあふといふことが無くなりますから、世の中が平和になり安穩になるのであります。是れが即ち現世に於ける利益であります。又此の信仰が來世にまでも続きます

れば、漸々に所謂菩薩行を積んで結局は佛の境界に到達することも必ず出来るのであります。是れが現世から來世までも續く所の利益であります。此の事をよく考へないで、現世を夢幻の如くに觀じ、専ら來世の事のみを心にかけて居るのは、信仰の正しい道を失つたものと申さなければなりません。

又如何なる人でも人として世に立つて居る以上は、所謂四恩を其の身に負うて居ることを忘れてはならぬのであります。先づ第一は父母の恩で、父母が自分の養育と教育とに力を盡してくれなければ、自分は一人前の人になることは出来なかつたのでありますから、父母の恩は片時でも忘れてはならぬものであります。第二には一切衆生の恩を思はなければなりません。多くの人が皆それ／＼の業に力を盡すので、自分は衣食住等の資料を得て、毎日を無事に送つて居られるのでありますから、その恩も亦洪大なものと思はなければならぬのであります。第三には國王の恩であります。若し此の國が平和でなく、他國の侵掠などを受けて居ますならば、吾々は一刻をも無事に過すことは出来ませぬ。而して此の國が榮えて行くのは全く君主たる方の御恩でありますから、吾々は殊に此の鴻恩に對して感謝しなければならぬ筈であります。第四には三寶の恩であ

ります。佛が世に出て貴い法を御説きになり、また僧が此の法を世に弘むるために力を盡し、此の三寶の恩に依つて吾々は人としての道を辨へることが出来るのでありますから、此の恩も亦まことに洪大なものと考へなければなりません。

吾々は皆此の四恩を身に負うて居ます。既に恩を負うて居ると知つた以上は此の恩に報ずることを思はなければならぬのは勿論のことです。如何にして此の四恩に報すべきかと申せば、世のため人のために出来るだけの力を盡すより外はありません。若し此等の多くの恩を受けて世に立つて居ながら、此の厚恩を忘却して、此の世を夢幻のやうに考へ、世のため人のために力を盡さうと思はないで、専ら來世に於て淨土に往生することのみを望んで居る者があれば、心得の甚しき者と申さなければなりません。華嚴經には地の神が『自分は如何なる物をも載せて、更に其の重きことを厭はぬけれども、唯だ恩に背くものだけは之を載することを厭はしく思ふ』といひ、種々の忘恩の行爲を數へ上げて、

是の如き人は一念の間も之を任持することを欲せず。

といつたといふことが説かれて居ります。釋尊は殊に報恩といふことを重んぜられたので、般若

經には、

一切世間恩を知り恩に報ずるは佛に過ぎたる者なし。

といつてあります。現世を軽く視る者の如きは更に報恩の念のない者でありまして、固より佛の御心には叶はぬものであります。

日蓮聖人が報恩といふことに特に重きを置かれたことは前にも申しましたが、聖人は其の師たる道善房の亡くなつた時に報恩鈔を御作りになつて、之を道善房の墓前で讀ませて、其の御志を亡師の靈に告げられました。此の報恩鈔には先づ、

老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず。

とあります。狐は畜生であるけれども、其の久しく住んで居た塚を忘れず、死ぬ時にも其の塚の方へ足向けぬといふことであります。また毛寶といふ人が或る時龜を救うて之を水の中に放してやつたが、その龜は永く毛寶の恩を忘れないで、後に至つて毛寶が戦ひに敗れ、海邊まで敵に追ひ詰められ、どうしても助からぬとなつた時に、その龜が水上に浮び出て、毛寶を背に乗せて安全な所へ連れて行つたといふことが傳へられて居ます。日蓮聖人は此等の事を擧げて、

畜生すら此の如し、いはうや人倫をや。

と仰せられ、續いて主人の恩に報ずるために命を捨てた人々の事蹟を説いて、
いかにいはうや佛教を習はん者、父母師匠國恩を忘るべしや。

と仰せられました。此の如くに報恩といふことを大切に思はるゝ聖人が、四恩に報ずることを忘れて往生極樂といふことのみを求むる者を排斥されたのは少しも不思議の事ではありませぬ。

悲しい哉數十年の間、百千萬の人魔縁に蕩かされ、多く佛教に迷へり。傍を好んで正を忘れんに、善神怒を成さざらんや。圓を捨て、偏を好まんに、惡鬼便を得ざらんや。如かず彼の萬祈を修せんよりは、此の一凶を禁ぜんには。

○魔縁に蕩かされ 魔とは障礙といふ意であります。佛の御遣しになつた大乘の教への障礙を爲すものは盡く魔と申さなければなりません。○傍を好んで正を忘れんに 釋尊が自ら眞實の教へであると仰せられた法華經を弘むる者の如きは佛教の正系と申さなければなりません。西方の極樂淨土の佛を崇めよといふやうな説は、佛教としては傍系に屬するものであります。此

の正系を捨て、傍系を重んずるのは間違つたことあります。○圓を捨て、偏を好まんに 圓とは完全なこと、偏とは不完全なことあります。法華經は佛の眞實の教へでありますから圓と申すべきで、其の他の方便の教へは偏と申すべきものであります。○萬祈を修せんよりは 如何に祈禱をして見ても、國民の信仰が間違つて居る間は國に災難のなくなる筈はないのであります。○此の一凶 念佛を唱ふることを指していはれたのであります。

日蓮聖人の淨土宗に對する批判はこれで一通り終るのでありますが、その淨土宗を排斥されたのは國を思ふ所の至誠より出たものであります。それ故に『斯ういふ教へを禁じないで、いかに災難を除くことを祈つても決して效き目のあるものではない』と斷定せられたのであります。凡ての天災地變等が天に依つて與へらるゝ警告であると知るならば、此等の天災地變を除くために國內に於ける一切の弊害を改めなければならぬといふことに氣がつかなければならぬ筈であります。むかし殷の湯王の時に七年の間旱魃が續いたので、太史といふ官の者が之を占うて『人を犠牲として天に祈つたならば必ず雨が降りませう』と申し出ました。湯王は之を聞いて『此の旱魃は國王たる自分の政治の執り方が悪いので、天に依つて與へられたる警告であると思はなければ

ならぬ。人を犠牲としなければならぬならば、自分が身を犠牲として天に祈つて、赦しを求むるより外はない』といつて、野外に出て天に祈り、六事を以て自ら責めました。それは、政に節あらざるか。民に職を失へるものあるか。宮室崇きか。女謁盛んなるか。苞直行はるか。讒夫昌ゆるか。

といふのでありました。女謁といふのは奥向きの婦人を通じて種々の事を頼み込むこと。苞直といふのは賄賂のことです。湯王は此の六事を以て自ら責め、自分には此の六つの過失があるものであらうから、其の罰として自分の生命を奪つて、人民の難澁を救つて下さるやうに祈りました。其の誠心が天に通じたと見えて、忽ちにして大雨が降つて人民が皆救はれたといふことであります。祈る者は皆斯ういふ心得でなければならぬので、自ら反省せずに唯だ天の助けを求めても、其の效驗のあらう筈はないのであります。

客殊に色を作して曰く、我が本師釋迦文、淨土の三部經を説いてより以來、曇鸞法師は四論の講説を捨て、一向に淨土に歸し、道綽禪師は涅槃の廣業を闡いて偏に

西方の行業を弘め、善導和尚は雜行を抛つて專修を立て、慧心僧都は諸經の要文を集めて念佛の一行を宗とす。彌陀を貴重すること誠に以て然り。又往生の人其れ幾ばくぞや。就中法然上人は幼少にして天台山に昇り、十七にして六十卷に涉り、並に八宗を究め具に大意を得たり。其の外一切の經論七遍まで反覆し、章疏傳記究め看ざるは莫し。智は日月に齊しく徳は先師に越えたり。然りと雖も猶ほ出離の趣に迷うて涅槃の旨を辨へず。故に偏く覲悉に鑑み、深く思ひ遠く慮りて、遂に諸經を抛つて専ら念佛を修す。其の上一夢の靈應を蒙つて四裔の親疎に弘む。故に或は勢至の化身と號し或は善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の責賤は頭を垂れ、一朝の男女は歩を運ぶ。爾してより來春秋推し移り星霜相積めり。而るに忝くも釋尊の教を疎にし、恣に彌陀の文を譏る。何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ、強ちに先師を毀り更に聖人を罵るや。毛を吹いて疵を求め皮を剪つて

血を出す。昔より今に至るまで此の如き悪言未だ聞かず。惶るべし慎むべし。罪業至て重し、科條争でか遁れん。對坐猶ほ以て恐れ有り、杖を携へて則ち歸らんと欲す。

○釋迦文 釋迦文といふのも釋迦牟尼といふのも同じことで、釋迦とは『能仁』の意、牟尼とは『寂默』の義であります。能仁とは一切衆生を御救ひになる大慈悲の力を具へて居らるゝことでもあります。寂默とは世間の何事からも全く影響を受けられぬことでもあります。これは廣大無邊なる智慧を具へて居らるゝからであります。○淨土の三部經を説いてより 無量壽經は釋尊が阿難に對して説かれたもの。觀無量壽經は釋尊が韋提希夫人に對して説かれたもの。また阿彌陀經は釋尊が舍利弗に對して説かれたものであります。それ故に三經共に『佛説』といふ二字が冠せられてあります。○四論の講説 四論といふのは龍樹菩薩の作られた大智度論と中觀論と十二門論、及び提婆菩薩の作られた百論とであります。曇鸞法師は最初此の四論を専ら研究して居たと申すことでもあります。○涅槃の廣業 涅槃經は四十卷といふ大部の經典

であつて、種々の修行の仕方が説かれてあるのでありますから、之を廣業といつたのであります。○西方の行業 西方淨土に往生する目的で彌陀の名を専ら唱ふるといふ、至て簡單な修行を勧めたのであります。○專修を立て 念佛の修行のみを專とするので、專修念佛と申すのであります。○慧心僧都 名は源信といふのですが慧心院に住したので斯く呼ばれたのであります。大和の人で叡山で修行を積み、四十三歳の時に往生要集を著はして念佛の修行の貴いことを説きました。一條天皇の寛仁元年に入寂、壽は七十六でありました。○往生の人 西方淨土に往生することを信じて安らかに此の世を去つた人のことを申すのであります。

○天台に昇り 叡山は日本に於ける最初の天台宗の道場でありますから、之を天台山といつたのであります。○六十卷に涉り 天台大師の著はされた法華玄義と法華文句と摩訶止觀とが各十卷あります。それから唐の妙樂大師が之に註釋を加へられたのが法華玄義釋籤と法華文句記と摩訶止觀輔行とで、各十卷ありますので、併せて六十卷であります。此の六十卷を研究すれば天台宗の教義はスツカリ解るのであります。○八宗を究め 奈良朝の末までに吾が國に傳はつたのが三論宗、法相宗、華嚴宗、俱舍宗、成實宗及び律宗の六宗でありまして、此の内

初めの三宗が大乗、後の三宗が小乗であります。それから平安朝に入つてから天台宗と眞言宗が弘まりました。此の八宗の教義を知れば、法然上人の當時に於ける吾が國の佛教の全部を究め盡したことになるのであります。○章疏傳記 經論の註釋書や高僧等の傳記のことを申すのであります。○出離の趣 如何にして一切の迷ひを去り一切の苦を離るべきかを知ることであります。○涅槃の旨 涅槃といふのは滅といふ意で、即ち一切の迷ひを滅し盡すことでもあります。死ぬことも涅槃と申しますけれども、深い意味から申しますと迷ひを滅することでもあります。○一夢の靈應を蒙り 善導和尚に逢つて念佛を弘むることを託された夢を見て、一層信心を増したといふことが傳へられて居ります。○四裔の親疎に弘む 四裔とは四方の果てといふことで、即ち日本全國を申すのであります。日本全國の人々に親疎を問はず皆念佛を勧められたのであります。○勢至の化身 勢至菩薩は阿彌陀佛の右に侍して、常に其の化導を助けて居らるゝといふことでありますが、此の菩薩は非常に智慧に勝れた方で、その智慧の力は至らざること無しといふので勢至といふ御名がついたのだと申します。法然上人は阿彌陀佛の信仰を弘むることに大功があつたので、世間で勢至菩薩の生れがはりであると申したのであります。

す。○釋尊の教 此の娑婆世界の教主は釋尊であるが、阿彌陀如來を信ぜよといふことは釋尊の仰せられたことであるから、此の娑婆世界の者が之を輕んずるのは誤つて居ると申すのであります。○彌陀の文 彌陀の四十八願のことでもあります。彌陀を頼めば必ず救はるゝといふことは此の四十八願を本として信ずるのであります。○聖代の時に課せ 近頃種々の災難があるけれども、法然上人が選擇集を書いたのは六十年も以前のこと、その頃に災難などは何も起らなかつた。然るに近頃の災難の責任を六十年前の法然上人に負はせるのは不當なことではないかといふのであります。○科條 刑罰のことで、斯ういふ惡言を吐けば必ず何等かの罰を受けるであらうといふのであります。

此より第五段の問答に入つて、教への正邪が明かになつて居ないのが一切の禍の本であるといふことを説かるゝのであります。そこで先づ日蓮聖人の前段までの説に對する客の非難が出て居るのであります。其の非難は要するに二ヶ條であります。其の一ヶ條は吾が國に久しく行はれて來た念佛を排斥するのは不都合であるといふこと。また他の一ヶ條は法然上人の如き學徳共に勝れた人を攻撃するのは不都合であるといふことであります。併し此の二ヶ條の非難は共に當を

得ぬものと申さなければなりません。

先づ第一に念佛といふことが如何に久しく行はれて来たものでも、それが末法の世の一切衆生を救ふべき力のないものであることが明かである以上は、斷じて之を排斥しなければならぬのであります。末法の世は法華經でなければ救はれぬといふことは釋尊御自身に明言して居らるゝ所でありますから、決して之を疑ふことは出来ぬので、傳教大師は、

正像稍や過ぎ已つて末法甚だ近きにあり。法華一乘の機今正しく是れ其の時なり。——守護國

界章

と仰せられました。又日蓮聖人は『教へは時に隨つて弘むべきものである』といふことを幾度も

繰返して仰せられ、例へば教機時國鈔の中には、

佛敎を弘めん人は必ず時を知る可し。譬へば農人の秋冬田を作るに、種と地と人の功勞とは違はざれども一分も益無く還つて損す。一段を作る者は少損なり、一町二町等の者は大損なり。春夏に耕作すれば上中下に隨つて皆分々に益有るが如し。佛法も亦復た是の如し。時を知らずして法を弘むれば益無き上に還つて惡道に墮するなり。

とあります。されば末法の世に於て法華經を弘むる妨げとなるものは如何に久しく行はれて来た教へでも之を排斥すべきは勿論のことです。

第二に法然上人が學徳共に勝れた人であつたのは少しも疑ひのないことで、日蓮聖人は其の人が人として價値がないから之を排斥せられたのではなく、其の説いたことが全く佛の御心に合はなかつたので之に嚴しい呵責を加へられたのであります。涅槃經の中には、

智に依つて識に依らず、了義經に依つて不了義經に依らざれ。

とあります。智とは佛の智慧のこと、識とは吾々の思慮分別のこと、如何なる教へを信すべきかに就ては佛の仰せられた所に從つて決定すべきである、後世の者が勝手に考へて決定してはならぬといふのであります。また了義經といふのは佛の眞實の教へのこと、不了義經といふのは方便の教へのこと、末法の世に於ては眞實の教へに依らなければならぬ、方便の教へに依つてはならぬといふのであります。是れは釋尊が特に末法の世のために、信仰を決定すべき標準をお示しになつた御言葉なのであります。されば法然上人が如何に勝れた人であつても、其の説が佛の仰せられた所と一致しなければ、無論法然上人の説を捨て、佛語に従はなければならぬ筈であり

ます。而して法華經が了義經であるといふことは釋尊の自ら御定めになつた所でありますから、固より之を疑ふことは出来ませぬ。

但し法然上人も御自身の考へで、末法の世は念佛に依つてのみ救はれるといふことを決定せられたのではなく、彼の曇鸞等三人の説に依られたのであります。佛説を措いて此等三人の説に依られたのが根本の誤りと申すべきであります。上人は一切經を五度も讀まれたといふことではありませんが、斯ういふ間違ひをするやうでは切角一切經を繰返して讀まれたかひは無いと思はれます。如何に博く學んで多くの事を知つて居ても、大切な事を措いて枝葉の事ばかりに眼をつけて居ては、博く學んだ效は更に無いのであります。孟子に公都子といふ人が『同じく人でありながら或は大人となり、或は小人となるのは何故でせうか』と問うた時に、孟子は之に答へて、
其の大體に従へば大人と爲り、其の小體に従へば小人と爲る。

といひました。なほ公都子が其の大體に従ふのと小體に従ふとの差がどうして出来るのかと問うたのに對して孟子は『それは要するに深く考へると、考へ方の淺はかであるとの結果である』といふ説明をして、

思へば則ち之を得、思はざれば則ち得ず。……先づ其の大なる者を立つれば則ち其の小なる者は奪ふこと能はず。此を大人と爲すのみ。

といひました。何事でも其の最も大切な點が明かにわかれば、小さい事に心を惹かれることはないといふのであります。佛敎の信仰に於ても全くその通りであります。法然上人は博く種々の事を研究されましたが、佛の御本意を辨へるといふ、最も大切な點に於て誤りがあつたので、其の一切の研究が何の役にも立たなくなつてしまひました。日蓮聖人が之に對して折伏を加へられたのは當然の事であります。

主人咲みて止めて曰く、辛さを蓼葉に習ひ臭きを溷廁に忘る。善言を聞いて惡言と思ひ、謗者を指して聖人と謂ひ、正師を疑つて惡侶に擬す。其の迷ひ誠に深く其の罪淺からず。事の起りを聞け。委しく其の趣を談ぜん。釋尊說法の内、一代五時の間に先後を立て權實を辨ず。而るに曇鸞道綽善導既に權に就いて實を忘れ、先に依つて後を捨つ。未だ佛敎の淵底を探らざる者なり。就中法然其の流を酌むと雖

も其の源を知らず。所以は何ん。大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て捨閉閣抛の字を置いて、一切衆生の心を薄す。是れ偏に私曲の詞を展べて全く佛經の説を見ず。妄語の至り惡口の科、言ひても比無く責めても餘有り。人皆其の妄語を信じ、悉く彼の選擇を貴む。故に淨土の三經を崇めて衆經を抛ち、極樂の一佛を仰いで諸佛を忘る。誠に是れ諸佛諸經の怨敵、聖僧衆人の讎敵なり。此の邪教廣く八荒に弘まり周く十方に遍す。

○辛きを蓼葉に習ひ 蓼の葉に住んで居る蟲はそれが習慣となつて、辛い蓼の葉を平氣で食べて居るのであります。○臭きを溷廁に忘る 便所の中に住んで居る蟲は少しも臭いと思はず、平氣で生活を續けて居るのであります。數十年來の習はしで、念佛の誤りに誰も氣のつかないのは全くそれと同様なことであります。○謗者 佛の正しい教へに背く者を盡く謗者といつたのであります。○先後を立て權實を辨ず 釋尊は最初に小乗の教へを説き、次に大乘に入られたのであります。大乘に入つても先づ方便の教へを説き、最後に法華經を説かれたので、こ

れが先後の順序であります。又權といふのは『かり』といふことで眞實の教へを説くべき時の來るまで、假りに方便の教へを説かれたので、法華經を説かるゝに先つて無量義經に於ては『四十餘年には未だ眞實を顯はさず』と明言せられ、法華經に入つては『正直に方便を捨て、但だ無上道を説く』と仰せられました。斯様に方便と眞實との區別を釋尊御自身にハッキリと御示しになつて居られるのであります。後の者が之を疑ふことの出来るものではありませぬ。○權に就いて實を忘れ 淨土三部經などは皆方便の教へで、眞實の教へといふのは法華經ばかりであります。たとひ釋尊が此の世を穢土であると仰せられ、或は西方の淨土に往生することを求めよと仰せられても、それは方便でありますから、眞實の教への説かれて後までもそれに執著して居るには及ばないのであります。曇鸞等三人の考へは全く顛倒して居ます。○先に依つて後を捨つ 淨土三部經よりも後に法華經の説法が終つて居るので、法華經は釋尊の最後の説法なのであります。尤も涅槃經の方が法華經より後に説かれたものでありますけれども、これは前にも申しました通り法華經を敷衍したものでありまして、法華經以上に出たことは何もありません。曇鸞等三人が法華經を捨て、それより前に説かれた淨土三部經に依つて信仰を

定めやうとするのは大なる誤りであります。○其の流を酌むと雖も 法然が彼の三人の流を酌んで淨土宗を弘めたので、彼の三人の説以上に一步も出て居ないといふことは自分で明言して居るところであります。○其の源を知らず 法然のいふ所と彼の三人と一致しない所があります。彼の三人が聖道門と名けたものの中には眞言宗や天台宗の教義は入つて居ないのであります。それを混同した法然は、充分に彼の三人の説を究めた者とはいはれないわけでありませぬ。○一切衆生の心を薄す 多くの人の心を混亂させて、誤つた信仰の方へ引き入れてしまつたのであります。○私曲の詞 自分勝手な考へで淨土三部經以外のものは末法の世の役に立たぬなどといつて居るのであります。○佛經の説を見ず 例へば淨土三部經の中の觀無量壽經にも、淨土に往生するために大切な條件として『大乘を讀誦する』といふことが擧げてあります。又法華經の中には明かに『此の經は末法の世に至つて普く世に弘まるべきものである』といふことが説かれてあります。法然が若し此等の經文をよく讀んだなら、『末法の世に入つては大乘の經典を讀んでも役に立たぬ』などといふことのいへる筈はないのであります。此處に日蓮聖人が法然に對して『私曲の詞を述べて全く佛經の説を見ず』といふ批判を下して

居られますのは、實に其の急所の中つて居る語であります。法然は『末法の世に入つては大乘の經典などを讀んでも役には立たぬ』と申して居りますけれども、淨土宗に於て所謂三部經の一として重んじて居る所の觀無量壽經には、未來の世に於て極樂に往生し得べき者を擧げた中に、また三種の衆生あつて當に往生を得べし。何等をか三と爲す。一には慈心にして殺さず、諸の戒行を具す。二には大乘方等經典を讀誦す。三には六念を修行し廻向發願して彼の國に生れんことを欲ふ。

とあります。此の中の第一と第三に就ては今此處で彼此申す必要はありませんが、第二に大乘の經典を讀誦することを極樂に往生する原因として擧げてあるのに注意すべきであります。方等といふのは方正平等の意でありまして、大乘の經典の中に説かれてあるのは少しも誤りのない事であるから之を方正といひ、又如何なる人にも大なる利益を與ふべきものであるから平等といふのであります。此の大乘の經典を讀誦するのが極樂に往生すべき因となるといふことが觀無量壽經にも出て居ります以上は、末法の世に入つて大乘の經典が役に立たなくなるなどいふ説の誤りであることはまことに明かであります。佛の慈悲は固より洪大無邊なものであります。たゞ佛

に頼ることばかりを主として自己の修行を怠るのは、あまりに佛の慈悲に狎れすぎたことで、斯ういふ事は固く慎まなければならぬのであります。

抑も近年の災を以て往代を難ずるの由、強ちに之を恐る。聊か先例を引いて汝が迷ひを悟らす可し。止觀第二に史記を引いて云く、周の末に被髮袒身にして禮度に依らざる者有り。弘決第二に此の文を釋するに左傳を引いて曰く、初め平王の東遷するや、伊川に被髮の者の野に於て祭るを見る。識者の曰く、百年に及ばじ、其の禮先づ亡びぬと。爰に知りぬ、微前に顯れて災後に到ることを。又阮籍逸才にして蓬頭散帶す。後に公卿の子孫皆之に教ひ、奴苟して相辱むる者を方に自然に達すといひ、擗節兢持する者と呼んで田舎と爲す。是を司馬氏の滅ふる相と爲す。

○近年の災を以て往代を難ずるの由 近年災難の多い責任を六十年むかしの法然上人に負はせるのは誤りであるといふが、それは淺はかな考へであります。物事はさう急に起つて來るもの

ではなく、善惡共に漸を追うて現はれるのであります。法然の説いたことがだん／＼に世の中に廣く弘まつて、日蓮聖人の頃になつて其の勢力が最も強くなつたから、種々の災難が起つて來たので、之をいつ迄も捨て、置けば、更に大なる災難が起るに違ひない。これを聖人が憂へられたのであります。○史記を引いて 司馬遷の著した史記の中に、周の平王の頃に世間の風俗が亂れて、禮儀を守らぬ者が多くあつたといふことがあります。斯うなつたのは要するに久しく王の徳が衰へて居た爲めなので、之を捨て、置くと結局は國が亡びるやうにもなるのであります。○被髮袒身 髪を振り亂したまゝで結びもせず、着物を半分脱いで肉身を露はして居るといふのは全く禮を無視した者であります。○弘決 前に申した妙樂大師の書いた摩訶止觀輔行のことで、委しく申せば摩訶止觀輔行傳弘決といふのであります。○平王の東遷 周の平王の時に都を洛といふ地に移したのであります。此の前から周は西方の犬戎といふ未開の國の迫害を受けて居ましたが、平王の時になつて其の迫害を避けるために、今まで鎬にあつた都を東方の洛に遷したので、これより周は益々衰へました。○野に於て祭る 祭りの時には姿を調へ禮を恭しく守らなければならぬも

のであります。祭りの時にも髪を振亂して居る者があつたといふのは禮の甚しく亂れた證據であります。○識者の曰く、周の大夫で辛有といふ賢者であります。斯ういふやうな賢者が其の時代の批評をした例は、此の左傳といふ書に幾度となく見えて居ります。○百年に及ばじ、百年も経ないうちに其の國が必ず亡びるであらうといふのであります。○其の禮先づ亡びぬ、禮を守る者がなくなつたのは人の心が不面目になつたからであります。それで禮が亡びたのはやがて國の亡びる前兆と見ることが出来るのであります。○又阮籍逸才にして、是れも摩訶止觀に引かれた例であります。此の阮籍といふのは晋の時代の人でありました。晋の時代には全く世間の務めを避けて、詩を作つたり酒を飲んだりして我が儘な生活をして居た者がありまして、其の殊に有名なのが竹林の七賢人といはれた人々でありました。此の七人の中でも阮籍といふのは殊に才の秀でた人として知られて居りました。○蓬頭散帶、髪を蓬のやうに亂して結ばず、また帶も締めずに亂暴な風をして居たのであります。○奴苟して相辱む、苟は狗といふ字の代りに用ゐたので、互ひに奴隸を扱つたり或は飼ひ狗を扱つたりするやうに、少しも禮を守らず、悪口をいひあつて居たのであります。○自然に達すといひ、禮などを守らぬのが自然の

道に達した賢人であるといつて、却つて重んぜられて居たのであります。○節揜競持する者、禮節を守ることには心を用ゐ、失禮の事があつてはならぬと心配して居る人のことであります。

○田舎と爲す、禮などを彼此いふのは田舎者であるといつて笑はれたのであります。○司馬氏の亡ぶる相、司馬といふのは晋の王の姓でありまして、魏の大將司馬懿の孫の司馬炎が獨立して王となつたのが晋の始めであります。後に至つて風俗が亂れて國が衰へ終に北方の未開の國の侵掠にあつて亡びました。

禮が行はれなくなれば其の國は必ず亡びるといふのは、まことに味ふべき説であります。禮といふものは人として互ひに重んじあひ、又各自の行ひを慎重にする心持が形に現はれたものでありますから、禮が廢れるといふことは人の心が輕薄になつた證據であります。禮記の中には、道徳仁義は禮に非れば成らず。教訓して俗を正すことは禮に非れば備はらず。争ひを分ち、訟を辨ずるは禮に非れば決せず。父子兄弟は禮に非れば定まらず。

とありますが、實際人々が禮を守らず、世間の秩序が亂れて來れば、風俗は全く壞れ果つるのであります。此の如くにして國の衰へぬといふことは決して望まれませぬ。

佛教に於ては勿論禮といふものが重んじられて居るので、釋尊御在世の頃から御弟子達の席次の亂れることを決して許されなかつたのに依つても、禮節が大切にされたといふことは明かであります。それで梵網經の中には、

若佛子應に法の如く次第に坐すべし。先に受戒せる者は前に在りて坐し、後に受戒せる者は後に在りて坐すべし。……坐するに次第無きは兵奴の法なり。我が佛法の中に於ては先なるべきは先に坐し、後なるべきは後に坐すべし。

とあります。受戒といふのは佛門に歸した時の式でありまして、受戒の前後は即ち佛弟子となつた前後で、席次は之に依つて定まつたのであります。兵奴といふのは未開の國の軍隊のことです。未開の國の軍隊では強い者が勢力を得て上座を占めて居るけれども、佛弟子がさういふ事ではならぬと戒めてあるのであります。禮を守らぬやうな者は放逸な者であります。放逸なものは佛の教へられたことを信奉することは出来ませぬ。されば禮を重んずるのは即ち誠實なる心を重んずるのに外ならぬのであります。

禮を重んぜぬものが多くなれば其の國は必ず衰微するのでありますが、其の衰微するまでには相當に久しい歳月を経るのであります。何事でも一朝一夕に起るものではありません。それ故に將來の事を豫め考へて置くことが最も肝要なのであります。易の中にも、

霜を履んで堅氷至る。

といふことがあります。霜の降るのは秋の末で、氷の厚く張るのは冬に入つてからであります。霜の降り初めた時に、やがて氷の厚く張る時が來るといふことを考へて、防寒の用意をしなければなりません。世の中の事は皆此の通りであります。日蓮聖人が此等の例を引かれたのは、眼の前に現はれた出來事を見て、將來の計畫を立てなければならぬといふことを徹底的に御教へになるためであります。即ち天災地變を天に依つて與へらるゝ警告と考へて、國民全體が反省しなければならぬといふことを御教へになつたのであります。

又案ずるに慈覺大師の入唐巡禮記に云く、唐の武宗皇帝の會昌元年勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て彌陀念佛の教を傳へしむ。寺毎に三日巡輪して絶えず。同二年回鶻國の軍兵等唐の界を侵し、同三年河北の節度使忽ちに亂を起す。

其の後大蕃國更に命を拒み、回鶻國重ねて地を奪ふ。凡そ兵亂は秦項の代に同じく、災火は邑里の際に起る。何に況んや武宗大に佛法を破り多く寺塔を滅ぼせるをや。亂を撥むること能はざるのみならず、遂に以て事有り。

此を以て之を推すに法然は後鳥羽院の御宇建仁年中の者なり。彼の院の御事既に眼前に在り。然らば則ち大唐に例を殘し吾が朝に證を顯はす。汝疑ふこと莫れ、汝怪しむこと莫れ。唯だ須らく凶を捨て善に歸し、源を塞いで根を截るべし。

○慈覺大師の入唐巡禮記 前に申した通り慈覺大師は十年間支那に留學したので、それは仁明天皇の承和五年から同十四年迄（唐では文宗、武宗、宣宗の三代）でありました。此の十年間に見聞した事を記録したのが此の書であります。○章敬寺 唐の都の長安にあつた寺であります。○回鶻國 唐の頃支那の北方に在つて勢力を張つた未開の國であります。○河北の節度使 河北といふのは黄河の北方の諸地方で、節度使といふのは其の地方一帯を取締る都督で、其の部下に多くの兵があるので之を恃みとして内亂を起したのであります。○大蕃國 吐蕃とい

ふのと同じ國で、今のチベットのことであります。○秦項の代 秦の始皇が死んでから兵を起すものが相續いて出て、其の中で最も有力なのが項羽と沛公とでありましたが、此の項羽と沛公と八年間相争つた末に沛公が項羽を亡ぼして天下を一統しました。これが即ち漢の高祖でありました。唐の武宗の時に國の亂れたさまを此の秦の末から項羽と沛公と争ひあつた時に比したのであります。○邑里の際に起る 處々の村が兵火の爲に焼き拂はれたのであります。○大に佛法を破り 武宗は後に至つて道教に歸依し、趙歸眞といふ道士を重く用ゐて佛教に迫害を加へ、四萬餘の佛寺を破却し、二十六萬餘人の僧尼を還俗させました。○事あり 死んだことであります。在位僅かに六年で重い病に罹つて悶死したのであります。○彼の院の御事 承久の亂のことを申すのであります。陪臣の北條義時が官軍に双向ひ、その結果として後鳥羽、土御門、順徳の三上皇が遠くの島へ御遷りになるといふやうな、吾が國の歴史に例のない不祥な事が起つたのは國に正しい教への廢れた結果と申さなければならぬのであります。○源を塞いで根を截るべし 水の源を塞げば流れは止まります。木の根を切れば枝や葉は枯れます。不正な教へを禁じてしまへば必ず人の心は正しくなるのであります。

唐の武宗は即位の初めは念佛宗を信じて居たのでありますが、幾くもなく道教を信するやうになり、趙歸眞といふ道士の勸めに従つて佛教に非常な壓迫を加へたので、後世より『惡武宗』などと呼ばれて居ます。併し此の武宗が死んで次の天子の宣宗の時から佛教に對する壓迫がなくなつたので、佛教はまた次第に盛んになりました。後漢の明帝の時に佛教が初めて支那に傳はつてから唐の代までに五百五十年を経て居ます。唐は二十代で二百九十年續きましたが、此の時代に於て佛教の發展はまことに目覺しいものでありました。儒教と道教とは共に佛教の妨げをいたしまして、韓退之が儒者の立場から佛教の攻撃をしたのは殊に有名な事實でありました。併し實際に於て佛教の妨げをしたのは主として道士でありました。此の武宗の佛教に對する壓迫の如きは、道教の禍の最も甚しいものと申すべきであります。武宗は位に在ること僅かに七年でありましたが、此の間に國內が絶えず騒動して居たことは此處に書かれてある通りであります。此より唐は次第に衰へまして武宗が死んでから六十年を経て遂に滅亡いたしました。正しい教への廢れた國は必ず衰へて行くといふことは、實際日蓮聖人の仰せらるゝ通りでありまして、史上に現はれた事實が能く之を證して居ります。

次に承久の亂の起つたのは、吾が國に正しい教への廢れた爲であるといふ聖人の御考へも、實に急所に中つて居ると申さなければなりません。北條義時の大逆無道は申すまでもありませんが、義時を諫めた者が一人もなかつたといふのは、其の當時に大義名分を辨へた者が全くなかつたといふことを證するものであります。義時の長子泰時は賢人として世に聞えて居た人でありましたが、父に對して諫言もせず、父の命に従つて大軍を率ゐて京都へ攻め上つたのを見ると、賢人どころではなく、矢張り全く道を辨へぬものゝ一人であつたと申さなければなりません。併し北條父子が如何に無道であつても、鎌倉幕府といふものゝ勢力が其の背後になければ斯ういふ不埒な事は出来なかつたのでありますから、鎌倉幕府といふものゝあつたのが禍の根源であると斷定しなければならぬのであります。それで日蓮聖人は前に申しました通り、頼朝を義時と共に謀叛人の中に數へられたので、其の御見識の高いにはまことに敬服の外はありません。

北條泰時は當時高僧として聞えて居た梅尾の明恵上人に歸依して居たので、此の承久の亂の後梅尾へ詣つた時に、『父の命とは申しながら、あゝいふ取計らひをしたのは實に恐れ入つた事である』と涙を流して語りました。明恵上人は之を聞いて『あなたは確かに大なる罪を犯したので

あるから、善事を爲して此の罪を償はなければならぬ。今より深く身を慎しみ、他日父の後を承けて執權となつたならば仁政を行つて、能く萬民を安んじ、此の大なる罪を償ふやうに心懸けなければならぬ』といつて懇々と諭したので、泰時は拜謝して歸つたといふことであります。明恵上人が泰時に斯ういふ親切な忠告を與へたのは感すべきことでありますが、陪臣として政權を握つて居るのが根本の大罪であるといふことを説かなかつたのは、日蓮聖人に比べて遠く及ばぬものと申さなければなりません。

客聊か和いで曰く、未だ淵底を究めざれども、數其の趣を知る。但し華洛より柳營に至るまで、釋門に樞鍵在り佛家に棟梁在り。然るに未だ勘状を進ぜず、上奏にも及ばず。汝賤しき身を以て輒ち莠言を吐く。其の義餘有れども其の理謂れ無し。○淵底を究めざれども 念佛が果して邪教であるかどうか、未だ充分に研究して見なければ、遽かに同意は出来ぬといふのであります。○其の趣を知る 邪教が行はれる時には其の國に禍が起るといふことは、事實に依つて先づ了解が出来たといふのであります。○華洛より柳營に

至るまで 華洛とは京都のこと。柳營とは幕府のことでありますが、此處では幕府のある鎌倉を指して居るのであります。○釋門に樞鍵在り佛家に棟梁在り 樞や鍵は戸締りに肝要なもので、棟や梁は家に肝要なものであります。佛教各宗の重要な地位に居る人々のことを申したのであります。○勘状を進ぜず 勘とは考證をすることで、若し念佛を勸むるのが果して國に害のある事ならば、佛教の何れかの派で重要な地位に在る人が、その理由を經論等を考證して明かにした上で、その禁止を請ふ所の書面を差出す筈であるといふのであります。○賤しき身を以て 日蓮聖人は何の身分もなく地位もない人であるから、念佛の禁止などいふ事を申出すべき資格はないといふのであります。○莠言を吐く 莠とは稻を枯らす雜草であります。其の言の不穩當なことを形容して申したのであります。○其の義餘有れども、其の國を憂ふる心持は充分によく解るといふのであります。○其の理謂れ無し 分限を忘れた點は道に合はぬといふのであります。

此より第六段の問答に入るので、日蓮聖人が地位も身分もない者でありながら、念佛を禁止せよといふ議論をするのは不遜であるといふ非難に答へて、聖人の抱負を御示しになるのであります。

す。此の客の非難は恐らく其の當時に於ける世間一般の考へを代表するものでありませう。奈良朝に於ても、平安朝に於ても各宗の高僧と稱せられた人々は皆朝廷の顯要な地位に居る人の歸依を受け、また其の保護を受けて居りました。武家が政治を執るやうになつても、將軍とか執權とかいふ者の歸依を得た人が、何れの宗に於ても勢力を有して居たのであります。法然上人の如きは農民や商人などを教化することに特に意を用ゐて居ましたけれども、關白藤原兼實に歸依せられて、選擇集も其の請に應じて作つたものであります。世間一般に斯ういふ習はしでありましたから、日蓮聖人のやうに一人の有力者の歸依をも受けず、また僧階などを何も持たぬ者が念佛を禁止せよなどいふことを唱ふるのは、僭越なことであると思はれて居たに違ひないのであります。

併しながら佛教の精神から申せば、苟くも僧である以上は、其の地位とか身分とかいふもの、差によつて其の責任の輕重があるべきものではありません。佛弟子たる者は佛の正法の弘通に力を盡すといふ責任を平等に負ふべきであります。釋尊は一國の太子といふ最も高い地位の方でありましたが、御出家の後は乞食によつて御生活を御續けになり、又御弟子の間にも全く差別を立

てられず、唯だ其の受戒の順序に依つて其の席次を定められたことは前に申した通りであります。實際増一阿含經に、

四河海に入りて復た河の名なし。四姓沙門と爲りて皆釋種を稱す。

とある通りのが行はれて居たのであります。印度には元來四姓といふものゝ區別があつて、其の區別は非常に嚴格に守られて居りました。其の最上の階級が婆羅門といふので、これは天を祭ることを職として居たものであります。其の次が刹帝利といふので、これは武士階級でありまして此の中から王も出たのであります。第三が毘舍といふので、これは商人と地主とであります。第四が首陀といふので、これは農民と奴隸とであります。此の四姓の外に旃陀羅といふ賤民があつて、これは魚を取つたり或は鳥や獸を取ることを業として居りました。

此等の階級の間には嚴しい區別が立てられて居りましたが、釋尊の門に入れば皆平等に取り扱はれました。印度には四つの大河がありますが、何れの河の水でも海に入れば皆同じ海水になつてしまひます。佛門に入つた者もそれと同様でありまして、其の出家する前の身分などは少しも問はれぬことに定められて居たのであります。併し久しい習はしでありますから、佛弟子の中に

も以前の身分を云々するものが多少あつて、例へば優波離の如きは首陀の家から出たものなので他の人々が之を疎んじて居ましたので、釋尊は之に厳しい訓戒を御與へになりました。日蓮聖人は此の釋尊の御精神を能く體得して居られたものでありますから、御自身の家系に就て一度も語られたことはありません。御両親は何れも立派な武士の家から出られたのでありますが安房の海岸の漁民の中で生活して居られましたので、聖人はいつも漁民の子であるといふことのみを仰せられ、御書の中には、

日蓮は安房國東條片海の石中の賤民が子なり。威徳なく有徳の者にあらず。——善無畏三藏鈔
とか或はまた、

日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出たり。——佐渡御書

といふ語のみであります。御両親は相當な身分の方で、決して賤民ではありませんでしたけれども漁民の中に混じて暮して居られたので、旃陀羅とまで仰せられたのであります。

聖人は此の如くに自ら賤民の子と名乗つて居られましたけれども、諸經の王たる法華經を弘むるといふ大任を負うて居られたことに就ては大なる満足を感じ、何人をも憚らずして堂々と其の

主張を貫かれたのであります。法華經の藥王品には此の經が最勝の經であることを説かれてあると共に、

能く是の經典を受持すること有らん者も亦復た是の如し。一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり。

とあります。されば此の法華經を弘むる者は凡ての人を教へ導くべき責任を其の身に負うて居るといふ自覺がなければならぬので、傳教大師も、

天台法華宗の諸宗に勝れたるは宗とする所の經に據るが故に自讃毀佗ならず。

と仰せられました。日蓮聖人も平左衛門が召取りに向つた時に、

日蓮は日本國の棟梁なり。予を失ふは日本國の柱礎を倒すなり。——撰時鈔

と仰せられ、また佐渡から弟子檀那の人々へ與へられた御書には、

師子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし。例せば日蓮が如し。これ傲れるにはあらず、正法を惜む心の強盛なるべし。——佐渡御書

とあります。此の意氣であつたればこそ、有らゆる迫害に堪へて法華經弘通の基礎を固められた

のであります。

主人曰く、予少量たりと雖も、忝くも大乘を學べり。蒼蠅驥尾に附して萬里を渡り、碧羅松頭に懸りて千尋に延ぶ。弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ。何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや。其上涅槃經に云く、若し善比丘、壞法の者を見て呵責し、駢遣し、舉處せずんば、當に知るべし是の人は是れ佛法の中の怨なり。若し能く駢遣し、呵責し、舉處せば、是れ我が弟子、眞の聲聞なりと。余善比丘の身たらずと雖も、佛法中怨の責を遁れんが爲に唯だ大綱を撮つて粗ば一端を示す。

○蒼蠅驥尾に附して 蠅は小さい蟲ですから遠くまで飛んで行けませぬけれども、良い馬の尾に止つて居れば萬里の遠くへも行かれます。○碧羅松頭に懸りて 蔦は地に匍ふばかりですが松の樹に絡みついて居れば空の上まで延びて行きます。大乘の教へを學んだ者は必ず國のため世

のために心を勞するやうな、大慈悲心を懷くやうになるものであります。○一佛の子 大乘を學んで怠らぬものは釋尊の御子とも見做さるべき者であります。○諸經の王に事ふ 法華經を諸經の王といふことは釋尊御自身の御言葉であります。法華經を弘むるために力を盡すものは諸經の王に事ふるものであるから、決して自ら輕んじてはなりません。○佛法の衰微 寺の數や僧侶の數がいかにも多くても、佛の正法が廢れて居れば佛法の衰へた時代といはなければならぬのであります。○善比丘 戒律などをよく守つて、其の言行に少しも缺點のないやうな僧侶のことです。斯く個人としては缺點がなくても、正法の妨げをする者に制裁を與へることが出来なければ法師たる責任を盡したとはいへぬといふことを次にいつてあるのであります。○壞法の者 佛の正法を守らず、また其の妨げをする者のことでもあります。○呵責し 其の罪を責めて之を改めることを勸めるのであります。○駢遣し 駢遣とは之を排斥して交際しないことでもあります。之を責めても其の過を改めなければ、之を排斥して交際を絶つて其の反省を促さなければならぬのであります。○舉處 然るべき處分をすることでもあります。之に反省を促すために、世間に身を立てることの出来ぬだけの處分をするのでありますが、これも

其の人を救はうといふ慈悲心に出るものであります。○佛法の中の怨 他人の過失を見て之に反省を促さず捨て置くのは慈悲の念が足らぬのであります。慈悲の念の足らぬものは佛の御心と一致せぬ者でありますから、佛法の敵ともいふべきであります。○大綱を撮つて 佛の御精神の大體を述べて世間の人の反省を求めるといふのであります。

茲に至つて涅槃經の文を引かれたのは日蓮聖人が諸宗に對して折伏を加へられたる理由を明かにすると共に、佛の慈悲といふことの眞の意義を示すために大なる力となるものであります。佛は一切衆生を救護するといふ大慈悲の念をもつて居られましたので、善事を行する者は之を獎勵して、益々其の善を勵むやうに力を添へられ、また罪を犯し過を遂ぐる者は厳しく之を責めて、其の行を改めて善に移ることを勧められました。眞の慈悲は姑息の愛とは全くちがふのであります。老婆が其の孫の愛に溺れて、孫の身體の害になる食物を、其の望むまゝに與へて却つて病を起させるのが所謂姑息の愛であります。佛は一切衆生を救護するといふ御考へを以て一貫して居られましたから、其の過失を責めらるゝ御態度はまことに嚴正なものであります。随つて御弟子に對しても、此の經文に示された通り、不正な者は厳しく之を責めなければならぬ、之を責め

ないで捨て置くのは慈悲心の足らぬものであるから、佛法の敵であると御教へになつたのであります。

日蓮聖人の御一生を一貫した折伏も全く此の佛意に一致せんがために外ならぬものであります。御言葉に顯はれた所は嚴しい呵責でありましたけれども、御心の中ではいつも泣いて居られたのであります。罪を犯した者を見ては其の思慮分別の足らぬのを憐れんで泣き、正しい行ひを續けて居る者を見ては共に之を喜んで泣き、涙の絶え間はなかつたので、

嬉しきにもなみだ、つらきにも涙なり。涙は善惡に通ずるものなり。……鳥と蟲とはなけども涙おちず、日蓮はなかねども涙ひまなし。此のなみだ世間の事にはあらず、但偏に法華經の故なり。若し然らば甘露の涙とも云ひつべし。——諸法實相鈔

と仰せられました。また、

我が父母を人の殺すに父母に告げざるべしや。惡子の醉狂して父母を殺すを制せざるべしや。惡人の寺塔に火を放たんに制せざるべしや。一子の重病に灸せざるべしや。——開目鈔
と仰せられたのは、折伏といふ事の眞の精神を悉されたるものであります。

正しい教へを世に弘むる方法は攝受と折伏との二つの道より外にはないので、勝鬘夫人は永く一切衆生を救ふことに力を盡すべきことを御誓ひになつて、

應に折伏すべき者は之を折伏し、應に攝受すべき者は之を攝受せん。何を以ての故に。折伏攝受を以ての故に法をして久しく住せしむればなり。

と仰せられました。攝受とは人の善を行するを見て之を奨励し之を援助して、益々其の善を勵ましむることでもあります。折伏とは人の過を責めて之を改めしむるために力を盡すことでもあります。兩者共に慈悲心より出るものでありますから、折伏を行するものは必ず攝受を行することも出来るのであります。日蓮聖人の如きは法華經の敵に對して烈しい折伏を加へられましたが、法華經に歸依した者には最も厚い保護と奨励とを加へられ、いつも慈父の其の子に對する通りの御態度でありました。法華經に歸依する者は永く之を範として仰がなければならぬのであります。

其の上去ぬる元仁年中に延曆興福兩寺より度々奏聞を經、勅宣御教書を申し下し、法然の選擇の印版を大講堂に取上げ、三世の佛恩を報ぜんが爲に之を燒失せし

め、法然の墓所に於ては感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしめ、其の門弟隆觀聖光成覺薩生等は遠國に配流せらる。其の後未だ御勘氣を許されず。豈に未だ勘狀を進ぜずと云はんや。

○去ぬる元仁年中 後堀河天皇の元仁元年のことで、法然上人が亡くなつてから十二年の後に當ります。○延曆興福兩寺 叡山の延曆寺と奈良の七大寺を代表して興福寺との兩寺から、念佛を禁ぜらるゝことを朝廷へも幕府へも願ひ出たのであります。○勅宣御教書 勅宣は朝廷から下され、御教書は幕府から出るものであります。此の時の勅宣は後堀河天皇より下され、御教書は執權たる北條泰時の名を以て出されたものであります。○大講堂へ取上げ 大講堂は叡山に在つて、天台宗をはじめ諸宗の教義を講ずる所であります。法然上人は叡山から出た身でありながら、法華經その他の大乘の經典が役に立たぬなど、申すのは不都合なことでもありますから、選擇集の版木を叡山へ取り上げて燒き棄て、しまつたのであります。○三世の佛恩を報ぜんが爲 過去の世から現世を通じて未來の世までに多くの佛が出られましたも、佛の御心は

皆一つなのでありますから、釋尊の御教へを奉ずる者を三世の諸佛が護つて下さるのであります。此の三世の諸佛の御恩に報ずるためには、經典を世に弘むることに力を盡さなければなりません。然るに法然の説いたことは貴い經典の世に弘まる妨げを爲すものでありますから、其の書の流布を禁ずるのが即ち三世の佛の御恩に報ずることになるのであります。○感神院の犬神人 感神院といふのは京都の祇園神社のことですが、當時は叡山に屬して居りました。犬神人といふのは祇園神社に使はれて居て、祭禮の時には神輿をかつぐ者であります。叡山から此の犬神人に命じて法然上人の墓を破却せしめたのであります。

此の元仁元年に於て浄土宗に對して嚴しい壓迫を加へられたのは、叡山と南都とから聯合して訴へ出たのに基くものであります。法然上人は專修念佛を唱へ、阿彌陀佛以外の佛菩薩を拜すること、及び浄土三部經以外の經典を讀誦することを一切雜行として排斥したのでありますから、此の教義を奉ずる者が多くなれば、叡山でも南都の諸寺でも皆歸依者を失ふことになりました。それ故に朝廷の御威光と幕府の力とを借りて此の浄土宗を絶滅せしめようと謀つたのは、諸宗の自衛上まことに已むを得ざる處置であつたと思はれます。併し法然上人の墓までも破却させたとい

ふのは餘りに嚴に過ぐる處置のやうであります。元來法然は十五歳の時から四十三歳まで叡山で修行をしたので、叡山の恩を蒙ることの最も深い人です。然るに叡山の敵となつたのでありますから、叡山に於ては背恩の者として大に憤慨し、其の支配の下に屬する祇園の使用人に法然の墓を破却せしめたのであります。又其の高弟たる隆觀とか賢光とかいふ人々も皆叡山に學んだ者であつて法然上人の門に歸し、共に叡山の敵になつたのでありますから、叡山の衆僧の憤慨は一層であつたであります。

また選擇集の版本を取り上げて叡山の大讲堂の前で焼いたのも、此の書の世間に流布するのを防ぐためのみならず、法然の背恩の罪に對して制裁を加ふる意味が無論含まれて居たのであります。日蓮聖人が此等の事實を擧げられたのは、此の選擇集が法華經弘道の妨げを爲すのみならず、諸宗の敵と視られたものであることを明かにせんがためであつたと考へられます。

客則ち和いで曰く、經を下し僧を誘ふことは一人として論じ離し。然れども大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を

以て捨閉閣拋の四字に載する詞勿論なり、其の文顯然なり。此の瑕瑾を守つて其の誹謗を成す。迷うて言ふか、覺つて語るか。賢愚辨へられず、是非定め離し。但し災離の起ること選擇に因るの由、其の詞を盛んにし彌其の旨を談ず。詮ずる所天下泰平國家安穩は君臣の樂ふ所、土民の思ふ所なり。夫れ國は法に依りて而して昌え、法は人に因りて而して貴し。國亡び人滅せば佛を誰か崇む可き、法を誰か信ず可けんや。先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし。若し災を消し離を止むるの術あらば聞かんと欲す。

○經を下し僧を謗すること 法然上人が大乘の經典を役に立たぬといつたとか、或は大乘を弘むる僧侶を念佛の妨げをする者として罵つたとかいふことを申すのであります。○一人として論じ難し 自分一人としては法然上人がそれ程の咎を犯したかどうか明かにはわからぬといふのであります。○此の瑕瑾を守りて其の誹謗を成す 法然上人の缺點を擧げて之を邪教とまで罵るといふのは、あまり酷ではないかといふのであります。○賢愚辨へられず是非定め難し

日蓮聖人が果して賢者であるか愚者であるか、また其の議論が正しいか間違つて居るか、容易には決定が出来ないといふのであります。○彌其の旨を談ず 正法が廢れた國に災難が起るといふ趣意はよく解つたといふのであります。○國は法に依つて而して榮え 正しい教へが行はれて居れば人の心が皆正しくなるから、其の國は必ず榮えて行くに違ひないのであります。○法は人に因つて而して貴し 教へを弘める人が立派な人物であれば、其の教へが必ず國民一般に貴ばれるのであります。○先づ國家を祈りて 國民としては國家の繁昌を祈るのが第一でなければならぬのであります。○術あらば 災難を歎いて居るばかりでは仕方がないから、災難を止むべき方法を聴きたいといふのであります。

此より第七段の問題に入るのであります。先づ客の言として國と法との關係が明かにされて居ります。國の發展して行くには國民たる者の協力一致といふことが何より大切なので、明治天皇の御製にも、
千よろづの民の力をあつめてぞ國はゆたかになすべかりける
とあり、また、

千よろづの民の力をあつめなばいかなる華も成らむとぞおもふ

とも仰せられてあります。而して國民が協力一致の實を擧ぐるのには各自に私の心を捨てること
が肝要であります。併しながら人の心は兎角一身の利害にのみ惹かれ易いものでありますから、
常に正しい教へが其の國に行はれて居なければならぬわけであります。教への廢れた國は必ず衰
へて行きます。聖徳太子が憲法の第二條に、

其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直うせん。

と仰せられたことを前にも申しましたが、これは人々をして私の心を捨て、國の爲に協力一致せ
しむるのには、佛教の力に依ることが第一であるといふ御趣意なのであります。

法の力といふものは此の如くに偉大なのであります。また法といふものは國の力によつて保
護されて榮えて行くのであります。國が亡びてしまへば佛を崇むる者もなく、法を重んずる者
もなくなりません。華嚴經に。

世道既に和平なれば佛法茲より始まる。

とあるのも此の事を申してあるのであります。例へば印度は釋尊の御降誕になつた國であります

から、本來は此の國が中心となつて全世界に佛教が弘まるべき筈であります。今日では印度に
全く佛教が廢れて居ります。これは印度といふ國が佛教を保護する力を失つてしまつたからであ
ります。又吾々の毎日讀んで居る法華經は羅什三藏といふ人が今より千五百餘年前に譯したもの
であります。此の羅什は印度の東方にあつた龜茲といふ國から佛教を弘むる目的で支那へ來
て、國王の保護の下に此の法華經を譯したのであります。羅什が種々の困苦を忍んで支那に來た
のは、斯ういふ大國の力で保護されなければ佛教は盛んにならぬといふことを信じて居たからで
あります。

此の羅什は年の若い時に諸國を歴巡つて佛教を學んだのであります。殊に沙勒といふ國で師
とした須梨耶蘇麻といふのが非常に勝れた學者でありまして、此の人が法華經の原本を羅什に與
へて、

佛日西に入つて遺耀將に東に及ぼんとす。此の經典は東北に縁有り、汝慎しんで傳弘せよ。

といひました。佛日西に入るといふのは釋尊の御入滅になつたこと。遺耀が東に及ぶといふのは
佛教が次第に東方に傳はつて多くの人を救ふといふ意であります。殊に此の法華經は印度に弘ま

らないで東北に弘まるであらうから、之を傳ふることを汝の責任として、必ず此の責任を果すやうにと命ぜられたのでありますが、羅什は支那に入つて法華經を譯し、其の師の命を立派に果しました。其の頃印度は國勢が次第に衰へて、法華經が印度を中心として世界に弘まる見込みがなくなつたので、須梨耶蘇麻は之を東方の有力な國に傳へたいといふ望みを立て、其の實行を羅什に命じたのであります。此より後に於て此の法華經は支那に弘まり、支那から朝鮮を経て吾が國へ傳はり、聖德太子が諸經の中に於て特に此の經を重んぜられたことは前に申した通りであります。而して日蓮聖人に至つては此の最勝の經が最勝の國たる吾が日本國を中心として世界に弘まるべきことを確信して、此の經の弘通に其の生涯を捧げられました。法と國との關係は此の如くでありますから、吾々も國のため法のために大に力を盡さなければならぬのであります。

主人曰く、余は是れ頑愚にして敢て賢を存せず。唯だ經文に就いて聊か所存を述べん。抑も治術の旨、内外の間其の文幾多ぞ。具には擧ぐべきこと難し。但し佛道に入つて數 愚案を廻らすに、謗法の人を禁じて正道の 侶を重んぜば、國中安穩

にして天下泰平ならん。

○治術の旨 國を安らかに治むる方針をどう立てたら宜いかといふことであります。○内外の間 内とは佛教のこと。外とは佛教以外の儒教とか或は婆羅門の教へとかいふものゝことでもあります。○正道の侶 佛の正法を世に弘むることに力を盡す人々のことであります。

此の客の如何にして國を安穩にすべきかといふ問に對する日蓮聖人の答へは、謗法の者を禁じて正しい教への弘まるべき道を開くより外はないといふことで、此より諸經の文を引いて之を證せらるゝのであります。謗法といふのは言葉を以て佛の正法を誹謗することのみでなく、凡て正法に背く行ひを總稱して謗法と申すので、天台大師は、

謗は是れ乖背の名なり。總て是れ解の理に稱はず、言審實ならず、異解して説く者を皆名けて謗と爲すなり。

と仰せられました。其の心に思ふことが正しい理に合はぬのも、其の口にいふ所が道に叶はぬのも、佛の御心持を取り違へて、自分の私見を以て説くのも皆謗法といふ中に含まれるといふので

あります。斯ういふやうな謗法の者が國中に多くなり、又有力者が斯ういふ者を保護して居れば、正しい教への弘まらう筈はありませぬ。日蓮聖人の當時に於ては武士といふものが國民全體の指導者であつたのですから、武士が謗法の者を保護すれば國民全體の信仰が佛意に合はぬものになり、武士が謗法の者を排斥すれば國民全體の信仰が正しくなるので、武士たる者の責任はまことに重いのであります。

徳川時代に至つて山鹿素行といふ學者が出て武士道を深く研究しましたが、其の武士の職分を説いた中に、

農工商は其の職業に暇あらざるを以て、常住相従つて其の道を盡すことを得ず。士は農工商の業をさし置き、此の道を専として、三民の間苟くも人倫を亂らん輩をば速に罰して、以て天下に人倫の正しきを待つ。是れ士に文武の徳知備はらざるばあるべからず。されば形には劍戟弓馬の用足らしめ、内には君臣朋友父子兄弟夫婦の道をつとめて、文武心に足り武備外に調ひて、三民自らは是を師とし是を貴んで、其の教に従ひ其の本末を知るに足れり。こゝに於て士の道立つて、衣食住をつぐのひ以て心易かるべく、主君の恩、父母の惠、しばらく報ずるに足り

ぬべし。此の務めあらざらんには、父母の惠を盗み主君の祿を貪りて、一生の間盜賊の命を全くするに同じ。甚だ以て歎息するにたへたり。

とあります。日蓮聖人が此の立正安國論を北條氏に提出して其の反省を促されたのも全く此の趣意に外ならぬと思はれます。

今日では國民が皆國家の隆昌を來すために力を盡すべき責任を負うて居るのでありますが、殊に世間に多くの影響を及ぼすべき地位に在る人は其の責任が重いといふことを自覺しなければなりません。殷の時代に賢人として知られた伊尹は、

天の此の民を生ずるや、先智をして後知を覺さしめ、先覺をして後覺を覺さしむ。予は夫の民の先覺なる者なり。予將に斯の道を以て斯の民を覺さんとす。予が之を覺すにあらずして誰ぞや。

といつて常に自ら勵んで居たさうであります。其の地位職業は種々ありますけれども、各其の分に應じて親は子を教へ兄は弟を教へ、長上は其の部下を教へ、互ひに勵ましあひ戒めあつて、互ひに其の誤りを匡し、互ひに正しい道を求むるやうにするのが即ち國恩に報ずる所以であるとい

ふことを忘れぬやうにいたしたいものであります。

即ち涅槃經に云く、佛の言はく、唯だ一人を除いて餘の一切の施は皆讚歎す可し。純陀問うて言さく、云何なるをか名けて唯だ一人を除くと爲ん。佛の言はく、此の經の中に説く所の破戒なり。純陀復言さく、我今未だ解せず、唯だ願はくば之を説きたまへ。佛純陀に語りて言はく、破戒とは謂く一闍提なり。其餘の在所一切の布施は皆讚歎す可し。大果報を獲ん。純陀復問はく、一闍提とは其の義云何。佛純陀に言はく、若し比丘及び比丘尼、優婆塞優婆夷有りて、麁惡の言を發して正法を誹謗せん。是の重業を造りて永く改悔せず、心に懺悔無からん。是の如き等の人を名けて一闍提の道に趣向すと爲す。若し四重を犯し五逆罪を作り、自ら定めて是の如き重事を犯せりと知りて、而も心に初より畏怖懺悔無く、肯て發露せず、彼の正法に於て永く護惜建立の心無く、毀皆輕賤して言に過咎多からん。是の如き等

も亦一闍提に趣向すと名く。唯だ此の如き一闍提の輩を除いて其餘に施さば一切讚歎せん。

○餘の一切の施 破戒の者にだけは保護を與へてはならぬが、その他の者に保護を與へて、佛敎を世に弘めさせるのは大に稱讚すべきことであるといふのであります。○純陀 釋尊の御入滅のすぐ前に御供養をした人であります。○破戒 佛のお定めになつた戒律を守らぬものです。が、戒律が守れないやうでは要するに佛の敎へられたことを實行しようといふ誠心のない者といはなければならぬのであります。○一闍提 不信といふ意であります。佛の御敎へになつたことを正しく信ぜず、心の曲つた者を皆一闍提といふのであります。○麁惡の言 全く禮にかなはぬやうな亂暴な言葉であります。○四重 殺生と偷盜と邪淫と妄語とであります。此の四つは凡ての罪の中で根本的のものでありますから之を四重罪と名けられてあるわけでありま

す。○怖畏 人の道に背いたことをして世間に多くの累を及ぼしたことを自ら畏るゝのであります。○發露 自分の罪を打明けて、今よりは決して斯ういふ罪を犯さぬといふことを誓ふの

であります。○護惜建立 正しい教へが世に弘まらぬのを何より惜しいことに思つて、之を大切に護るのを護惜といひ、此の教へが普く世に弘まるやうに力を盡すのを建立といふのであります。○言に過咎多からん 佛の御教へに背いたことをいふのを皆過咎といふのであります。最初に引かれた涅槃經大衆所問品の文には、一闍提に保護を加へてはならぬといふことが説かれてあります。一闍提とは正しい信仰をもつて居ない者のことであります。斯ういふ者を保護するのは正しい信仰の妨げとなりますから大なる罪であります。譬へば稲の中に雜草が生えて居ると稲は決して健全には伸びませぬ。若し其の雜草に肥料を與へれば稲が益々弱つて、やがて枯れてしまふかも知れませぬ。されば雜草に肥料を與ふるのは稲を枯らすといふ罪を犯して居るわけでありませぬ。一闍提に保護を與ふるのもそれと同じことであります。ところが自分に正邪を識別する力がないと、邪説を唱へて居る者を正しい者と誤つて之を信用し、之に保護を加へたりなどすることがあります。斯ういふ人は自分で罪を作ると知らずに、大なる罪を作つて居るわけでありませぬ。外國に『無智は罪の親である』といふ諺があるさうですが、實際世の中にはさういふ事が多くありますから、互ひに自ら戒めて斯ういふ過に陥らぬやうに心懸けなければなりません。

此の一闍提といふのに二種あるといつてあります。その一は佛の正法の弘まる妨げをして居ても之を悔悟せず、いつ迄も其の罪を重ねて居る者であります。その二は自分の身に多くの重罪を犯して居ても之を悔悟せず、いつ迄も其の悪行を重ねて居る者であります。人は誰も初めから聖人賢人でもなく、佛菩薩でもないのでありますから過失の多いのは已むを得ませぬが、能く其の過を悔いて之を改め、自ら善を行ふことに依つて其の罪を償ふことに心懸けさへすれば、それで前の罪は自ら消ゆるのであります。最も恐るべきは罪を犯して之を悔ゆる心のないことではありません。孔子は、

過ちて改めざる、是を過といふ。

と教へられました。また左傳の中には、

人誰か過無からん。過ちて能く改むれば、善是より大なるは無し。

といふ語があります。其の過を改むる者は、それから多くの善事を積むことが出来ますから、それで悔悟といふことが非常に貴いのであります。

佛敎の經典の中には懺悔の貴いことを教へられた語が非常に多くあります。其の一二を擧げて

見ますと、未曾有經には、前心惡を作ること雲の目を覆ふが如く、後心善を起すこと炬の暗を消すが如し。

とあります。前心とは懺悔せぬ前の心、後心とは懺悔した後の心であります。懺悔した者は多くの善事を爲して世間に多くの益を興ふることが必ず出来るのであります。また法句經の中には、過ちて非惡を犯さば能く追悔するを善とす。是の明世間を照すこと日の曇なきが如し。

とあります。日が凡ての物を照すやうに、懺悔して其の過を改めた人は、多くの人の手本となるやうな善事をいくらかも果して行くことが出来るのであります。また大集經の中に、百年の垢衣も一日に於て瀚ひて鮮淨ならしむべきが如し。

とあるのは殊に有益な教へであります。久しい間に汚れた着物でも一日で全く淨らかに洗ふことが出来ると同様に、眞に懺悔すれば久しい間の悪い習はしを根本から改めて、その後は永く清淨な生活を續けることが出来るのであります。過失があつても之を改むることを知らぬ人ほど不幸なものはありませぬ。又之を諫めて其の過を改めさせるのは眞に大なる功德と申すべきであります。

又云く、我念ふに往昔閻浮提に於て大國の王と作れり。名を仙豫と曰ひき。大乘經典を愛念敬重し、其の心純善にして麤惡嫉妬有ること無かりき。善男子、爾の時に於て心に大乘を重んじ、婆羅門の方等を誹謗することを聞き、聞き已りて即時に其の命根を斷ちたりき。善男子、此の因縁を以て是より已來地獄に墮ちず。又云く、如來昔國王と爲りて菩薩道を行ぜし時、爾の所の婆羅門の命を斷絶しき。又云く、殺に三有り。謂く下中上なり。下とは蟻子乃自一切の畜生なり。唯だ菩薩の示現生の者を除く。下殺の因縁を以て地獄畜生餓鬼に墮ち具さに下の苦を受く。何を以ての故に。是の諸の畜生に微善根有り。是故に殺す者具さに罪報を受く。中殺とは凡夫人なり。阿那含に至るまで是を名けて中と爲す。是の業因を以て地獄畜生餓鬼に墮ちて具さに中の苦を受く。上殺とは父母乃至阿羅漢辟支佛、畢定の菩薩なり。阿鼻大地獄の中に墮つ。善男子、若し能く一闍提を殺すこと有らん者は、

則ち此の三種の殺の中に墮ちず。善男子、彼の諸の婆羅門等は皆是れ一闍提なり。

○鹿惡嫉吝 正しい道に背いた行ひは一切鹿惡な行ひであります。嫉とは善人を妬んで其の妨げをすること。吝とは人のために力を盡すのを嫌ふことであります。○方等を誹謗する 方等とは大乘の教へのごとで、方正平等といふ意であります。また誹謗といふのは口に出して譏ることだけでなく、凡て正しい教への妨げをするのを誹謗といふのであります。斯ういふ罪を犯した者に厳しい制裁を與へなければ、正しい教へは決して弘まりませぬ。○命根を絶ち 彼等を皆死刑に處したのであります。○地獄に墮ちず 大乘を重んずる心が永く続いたから、地獄に墮ちるやうな罪を犯すことは勿論なかつた筈であります。○下とは 下とは罪の軽いことで、動物を殺すのは殺生の罪の中では軽いものであります。○示現生の者 世間の人に善い教へを與ふるために種々の姿を現はすのですが、時として動物の姿となつて世の中に生れて來られることもあるのであります。○下の苦 比較的軽い苦のことです。○微善根有り

動物でも互ひに助けあふ心をもつて居ます。また人が之を愛すれば其の愛に感ずるといふ念をも持つて居ります。動物と雖も決して輕んずべきものではありませんから、妄りに之を殺したものは其の報を受けなければならぬのであります。○阿那含に至るまで 阿那含とは前にいつた通り、阿羅漢の下の地位であります。たとひ佛法を學んでも、これ迄は未だ煩惱を除き盡すことの出來ぬものでありますから、たとひ之を殺しても、阿羅漢以上の者を殺したのよりは幾分か其の罪が輕いわけであります。○辟支佛 譯して緣覺といふのであります。聲聞も緣覺も共に小乗の教へを學んで世間の無常を觀じ、貪瞋癡等の煩惱を除き得たものであります。佛の御教へを聞いて世間の無常を觀じたのを聲聞といひ、自己の日々の經驗に思ひ合せて、佛の御教へを深く味ひ、世間の無常を殊に深く觀じ得たものを緣覺といふのであります。○畢定の菩薩 佛となるまでは決して修行を怠るまいといふ考への定まつて變らぬのを、名けて畢定の菩薩といふのであります。○三種の殺の中に墜ちず 多くの人を救ふための殺生でありますから、殺生罪とはならないのであります。

次に引かれたのは同じ涅槃經の聖行品の文と梵行品の文とであります。共に謗法の者を殺すの

は善事であることを説かれてあるのでありますが、後の梵行品の文には種々の殺害にそれ／＼其の報のあることを説いて、獨り一闍提を殺すことのみが善事であるといふことを明してあります。たとひ如何なる悪人でも之を諭して其の罪を改めさせることが出来れば、其の悪人は變じて善人となり、世間に多くの利益を興ふることも出来ます。例へば鴛鴦摩といふ者は其の師とした婆羅門に惑はされ、多くの人を殺すのが天上界に生を受くる因となると信じて刀を執つて街に立ち、非常に多くの人を殺しましたが、釋尊の御教へを受けて其の罪を悔い、後には佛の御化導を助くるやうな立派な人物になりました。斯ういふ者は如何に重い罪を犯しても之を殺さず、懇ろに之を教へて懺悔させ、自ら善事を積んで自ら其の罪を償はせるやうに導いてやるべきであります。併しながら一闍提といふのは自ら世を惑はすやうな悪行を重ね、佛の正法の妨げをして居ながら少しも之を悔いぬものでありますから、之を殺すより外はないのであります。斯ういふ者を生かして置けば世間に害が多く及ぶのみであります。又その當人も益々罪を多くするのみであります。それ故に之を除くのが善事であるといふのであります。

但し斯ういふ悪人を殺してもよいといふのは在家の人に對していはれるので、出家の人は絶對

に殺生をしてはならぬのであります。梵網經に説かれた戒は皆出家の人のためでありますが、其の中の殺生戒には、

一切有命の者を故意に殺すことを得ざれ。

とあります。一切の生命のある者といふのですから、無論悪人も此の中に含まれて居るわけであります。又畜殺生具戒には、

一切の刀杖弓箭鋒斧鬪戰の具、及び惡網羅利生の器を一切畜ふことを得ざれ。

とあります。即ち人のみならず一切の動物を殺したり捕へたりする器を貯へて置くことも出家の人には厳しく禁じられて居るのであります。然るに在家の人は正法を護るために殺生を許してあるので、正法を護るために悪人を殺すのは罪どころではなく、大なる善事であるといつて、次に引かれた經文には其の事實をも委しく擧げてあります。

何故に悪人を殺すのが大なる善事であるかといへば、それが多くの正しい人を護り、正しい教への普く世間に弘まる助けとなるからであります。在家の人でも苟くも佛教を信奉する以上は、必ず菩薩行を勵むといふ志でなければなりません。菩薩はいつも人を生かし、人を救ふために

力を盡すべきもので、梵網經の中に、

菩薩は應に常住の慈悲心、孝順心を起し、方便して救護すべし。

とある通りの心懸けでなければならぬのであります。されば一人を殺して多くの人を生かし、一人を制裁して多くの人を護ることが出来れば之を善事と認めらるゝわけであります。支那でも昔から武といふのは戈を止むるといふ意であると申して居るので、左傳には、

戈を止むるを武と爲す。

といふ楚の君主の言が出て居ます。即ち戈を用ゐて戦ふのは不正な者が戈を揮ふのを止めて天下の害を除くのであるといふ意であります。釋尊が正法を護るために武器を帶ぶるのを許されたのも無論之と同じ趣意に出たものであります。

仁王經に云く、佛波斯匿王に告げたまはく、是故に諸の國王に付屬して、比丘比丘尼に付屬せず。何を以ての故に、王の威力無ければなり。

涅槃經に云く、今無上の正法を以て國王大臣宰相及び四部の衆に付屬す。正法を

謗る者は大臣四部の衆當に苦治すべし。

○波斯匿王 其の妻たる末利夫人と共に深く釋尊に歸依して居まして、其の女が勝鬘夫人であります。一家一族揃つて正しい信仰を持つ者の範といはれました。○付屬して 佛教を世に弘むることの責任を負はせらるゝことでもあります。○王の威力無ければなり 王は不正な者に刑罰を與へ、其の甚しき者は死刑に處することも出来ませんが、出家の人にはさういふ力はありません。○苦治すべし 苦とは厳しいことでもあります。正法の妨げをする者には厳しい制裁を與へ、場合に依つては之を死刑に處しても宜しいのであります。

次に引かれてあるのは仁王經受持品の文と涅槃經長壽品の文でありますが、何れも國王をはじめ爲政者が佛の正法を護るために力を盡し、その妨げとなる者に制裁を加へよといふことを説かれたものであります。其の制裁にも種々ありますが、到底悔悟せしむべき見込みのない悪人は其の生命を絶つて、其の世間に害を與ふることを防ぐより外はありません。然るに前に申す通り

出家の人は殺生を一切禁じられて居るのでありますから、正法を護るといふ大任を國王及び國王を輔くる人々に負はせられたのであります。人民のために利を興し害を除くのは國王を始め爲政者の務めでありますから、心地觀經には、

國王は群民を視ること子の如く、晝夜擁護の心を捨つること無し。擁護の恩や大なりといふべし。

とあり、また王の徳を數へ擧げられた中に、

一には能照と名く、智慧の眼を以て世間を照すが故に。二には莊嚴と名く、大福智を以て國を莊嚴するが故に。三には與樂と名く、大安樂を人民に與ふるが故に。四には伏怨と名く、一切の怨敵を伏するが故に。五には離怖と名く、難を卻けて恐怖を離れしむるが故に。

とあります。又重ねて、

世間所有の恐怖は王の福力に依つて生ずること能はず。

とも申してあります。即ち國王は武力を以て其の國の難を除き、人民に害を及ぼす者を除くことが出来るといふことを擧げて王の徳を稱讃せられたのであります。此處には王の事ばかり申して

ありますが、王を輔くる者も無論王を同じ心を以て此の事に力を添へなければならぬのであります。

また尼乾子經にも王が不正なものに制裁を與へなければならぬといふことが説かれてありまして、『王には三種の事あり』とあります。その三事といふのは、

一には信あり。二には恩あり。三には大力あり。

といふのであります。而して其の大力といふのは不正なものに制裁を與ふる力のことであります。王は此の如き力をもつて居るのでありますから、其の力をいつも善い事のために用ゐなければならぬので、若し自分の威勢を示すために其の力を濫用すれば大なる罪となります。

自ら用ゆる時は大理を失ふ。——法句譬喻經

とあるのは此の事を戒められたのであります。それで前に申した尼乾子經には其の不正な者に制裁を加ふる時の心得を説いて、
慈心に依りて瞋心に依らず。

とあります。多くの人を救ふといふ慈悲心に依つて不正な者に制裁を加ふるので、瞋恚の念を挾

んではならぬといふのであります。此の事は他の不正な國と戦ふ時に國民一同が心得て居なければならぬことで、

國のため仇なすあだはくたくともいつくしむべき事を忘れそ

と申す明治天皇の御製を常に服膺し奉るべきであります。

又云く、佛の言はく迦葉、能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持する者は五戒を受けず、威儀を修せず、應に刀劍弓箭鉞槊を持すべし。又云く、若し五戒を受持する者あるも、名けて大乘の人と爲すことを得ざるなり。五戒を受けざるも正法を護ることを爲せば、乃ち大乘と名く。正法を護る者は當に刀劍器仗を執持すべし。刀杖を持つと雖も我是等を説いて、名けて持戒と曰はん。

○能く正法を護持する 釋尊が前の世に於て國王であつて、佛の正法の普く國中に弘まるため

に常に力を盡されたのであります。○是の金剛身 金剛身とは即ち佛身のことです。佛は何者にも妨げられず、何者にも損はれず、佛に敵し得る者は全くないのでありますから、之を稱して金剛不壞と申します。釋尊は六ヶ年の難行苦行を積んで佛と成られたと傳へられて居ますけれども、實は前の世に於て既に多くの善根を積んで居られたことが、其の佛身を成就せらるゝ原因となつて居たのであります。○五戒を受けず 主として五戒の第一の殺生戒のことをいつて居られるのであります。正法を妨ぐる者に制裁を與ふる場合には殺生戒を守らず、之を殺しても宜いのであります。○威儀を修せず 威儀とは禮にかなつた起居動作を申すのであります。人を殺す場合に禮儀などを守つては居られないのであります。それは少しも罪にはならないのであります。○五戒を受持する者あるも 五戒を守るばかりでは菩薩行を全うしたもといはれませぬ。正法を世に弘めて多くの人を救ふことが出來てこそ菩薩といはれるのであります。○器杖 昔は杖も武器の一つとして用ゐられて居たのであります。

此處に引かれたのは皆涅槃經金剛身品の中の語であります。先づ五戒を守つたのみでは大乘の人といはれぬとあるのが大切な語であります。大乘の人といふのは即ち菩薩行を勵む人のこ

とであります。法華經の序品に多くの菩薩の名を擧げてありますが、其等の菩薩の徳を稱へられたのに、

慈を以て身を修め善く佛慧に入る。

とあります。即ち一切の人に慈悲を施すことを目的として修行を重ねて、次第に佛と同じやうな智慧を具ふるやうになるといふことであります。之に依つて見ましても、菩薩として修行を積むのには慈悲心を具ふることが何より大切であることは明かであります。それ故にたとひ五戒を正しく守つて居ても、多くの人を救ふために力を盡さうといふ念がなければ菩薩とはいはれぬのであります。また多くの人を救ふために悪人を殺すならば、たとひ殺生戒を犯して居ても菩薩と稱せらるべき者であります。

又人を救ふために殺生戒を破つても、佛は之を持戒の人と視ると仰せられました。一體何のために戒を持たなければならぬのかといへば煩惱を除かんがためであります。煩惱が盡く除かれさへすれば必ず一切衆生を救ふために力を盡すやうになれるのであります。それ故に梵網經には、計我著相の者は是の法を信すること能はず。

とあります。計我とは自分一身の利害ばかりを考へて居ること。著相とは世間の地位とか勢力とかいふものに執著して居ることであります。斯ういふものは佛の定められたる大乘戒を守らうといふ念は起せぬといふのであります。佛と同じやうな智慧を具へて、一切衆生を救ふべき身となりたいといふ念があつてこそ、能く佛戒を守つて吾が心の中から一切の煩惱を除くことも出来るのであります。戒を持つといふは唯だ戒を持つだけが目的ではなく、大なる慈悲心を具ふる身となることが目的であるといふことを忘れてはなりません。それ故に多くの人を救ふために力を盡した者は戒を破つたやうに見えても、實は戒を持つ心と能く一致して居るといふことを佛が認められたのであります。

又云く、善男子、過去の世に此の拘尸那城に於て佛の世に出たまふこと有りき。歡喜増益如來と號しき。佛の涅槃の後、正法の世に住せること無量億歳なり。餘の四十年佛法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り、名をば覺徳と曰ふ。爾の時に多く破戒の比丘有り、是の説を作すを聞きて皆惡心を生じ、刀杖を執持して此の法師を

逼む。是の時の國王名を有徳と曰ふ。是の事を聞き己りて護法の爲の故に即便説法者の所に往き至り、是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戦闘す。爾の時に説法者厄害を免るゝことを得たり。王爾の時に於て身に刀劍箭槊の瘡を被り、體として完き處芥子の如き許りも無し。爾の時に覺徳尋で王を讚めて言く、善哉善哉、王今眞に是れ正法を護れる者なり。當來の世に此の身當に無量の法器と爲るべしと。王是の時に於て法を聞くことを得己りて心に大歡喜を生じ、尋で即ち命終して阿闍佛の國に生れ、而も彼の佛の爲に第一の弟子と作る。其の王の將從人民眷族の戦闘すること有りし者、歡喜すること有りし者、一切菩提の心を退せず、命終して悉く阿闍佛の國に生る。覺徳比丘も却て後壽終りて亦阿闍佛の國に往生することを得て、而も彼の佛の爲に聲聞衆中の等二の弟子と作る。若し正法の盡さんと欲すること有らん時は、當に是の如く受持し擁護すべし。迦葉、爾の時の王とは則ち我が身

是なり。説法の比丘は迦葉佛是なり。迦葉、正法を護らん者は是の如き無量の果報を得ん。是の因縁を以て我今日に於て種々の相もて以て自ら莊嚴し、法身不可壞の身を成ずることを得たり。佛迦葉菩薩に告げたまはく、是故に護法の優婆塞等應に刀杖を執持して、擁護することは是の如くすべし。善男子、我涅槃の後濁惡の世、國土荒亂し、互に相抄掠し、人民飢餓せん。爾の時に多く飢餓の爲の故に發心出家するもの有らん。是の如き人を名けて禿人と爲す。是の禿人の輩正法を護持するを見ては驅逐して出さしめ、若は殺し若は害せん。是故に我今持戒の人が諸の白衣の刀杖を持てる者に依つて以て伴侶と爲ることを聽す。刀杖を持すと雖も、我は是等を説いて名けて持戒と曰はん。刀杖を持すと雖も命を斷つべからず。

○正法の世に住せる 人々が佛の教へを能く守り、能く之を實行して居たことを申すのであります。○餘の四十年佛法の末 此の佛の御教へが實行されぬやうになるまでの四十年間のこと

であります。○是の説を作すを聞き 覺徳比丘は自分の身に實行したことを説いたのですから、之を聞いた者は深く感激して皆之を信じました。之を信する者が多くなれば、破戒の比丘が重い罪を犯して居るものだといふことが明かになります。それ故に彼等は覺徳比丘を敵とするやうになつたのであります。○悪心を生じ 彼の覺徳比丘を殺して自分達の妨げを除かうといふ決心をしたのであります。○説法者 覺徳比丘のことを指すのであります。○當來の世に未來のことでもあります。正法を護るために生命を捨てた報として、未來は非常に徳の勝れた人に生れるであらうと申すのであります。○無量の法器 法器とは法を弘むる人のことでもあります。法を弘めて無量の利益を興へる者といへば佛より外にはありません。されば無量の法器になるといふのは佛になるといふことであります。○法を聞くことを得 正法を護る功德の莫大なることを聞いたのであります。○阿閼佛の國 阿閼といふのは無動といふ意味であります。無動とは如何なる事があつても、心に少しも動搖を生ぜぬことであります。此の佛の住せらるゝのは善快といふ國であると申すことであります。○王の將從 王の臣下で王と共に戦つた者のことを申すのであります。○菩提の心 菩提とは智慧のことで、菩提の心といふのは菩提

提を求むる心のことでもあります。智慧を具ふるやうになるのは佛法を學ばなければなりません。それ故に菩提を求むる心とは即ち佛法を學びたいと望む心に外ならぬのであります。此の菩提の心を起すことを『發心』と名けられて居ります。○迦葉佛 釋尊の直ぐ前に此の世界に出られた佛であると傳へられて居ります。遠いむかしから七佛が此の世に出られて其の第六が迦葉佛、その第七が釋尊であるといふことであります。○種々の相もて 佛は三十二相を具へて居らるゝのであります。佛の御徳が自ら御姿に現はれたのが即ち三十二相で、佛の御姿を仰ぎ見た者は未だ御説法を聴聞しないうちに心が清淨になるのであります。○法身不可壞の身 佛は絶對の理をお悟りになつて、世に出て法を説かるゝのでありまして、何人も佛に敵し得るものはありません。法身不可壞の身を具へて居らるゝとは此の事でもあります。

○護法の優婆塞等 出家の人は如何なる場合にも武器をもつことの出来ぬものと定まつて居るので、在家の人が武器を執つて之を保護するのであります。○互に相抄掠し 個人の間にも暴力を以て他人の物を奪ふ者があり、又國際に於ても暴力に訴へて他國を侵掠するものが現はれて來るのであります。○飢餓の爲の故に 世間で生活が出来ないので、其の生活の安全を求め

る目的で出家するのであります。○禿人と爲す 禿とは頭に毛のないことであります。出家して髪を剃つて居ても信仰心などは少しもないのでありますから、僧侶とはいへないので、唯だ頭に毛のない者といふべきのみであります。○驅逐して出さしめ 世間の有力者の助けを假りて、正しい僧侶を追ひ出してしまふのであります。○持戒の人 持戒堅固なる僧侶のことを申すのであります。○命を斷つべからず 法を護るために人を殺すのは世の中の爲であるから、殺人の罪を犯した者として之に刑罰を與へてはならぬといふのであります。

是れも同じく涅槃經金剛身品の中の一節であります。此の有徳王の事蹟はまことに正法を護る者の範として仰ぐべきものであります。人として生命を惜まぬものは誰もありませんが、正法を護るために生命を捨てるのは、まことに捨つるかひのある事と申すべきであります。佛の正法を信奉して居るものは、一日生きて居れば一日だけ世の中に益を與へて居るのでありますから、輕々しく生命を捨てゝはならぬのであります。併し其の生命を捨つることが正法を護る役に立つ時には喜んで其の身を犠牲とすべきであります。法華經の勸持品に、
我身命を愛せず、但だ無上道を惜む。

とありますが、無上道とは即ち佛の説かれた眞實の教へのこととあります。此の無上道が世間に廢るゝことは何よりも惜むべきでありますから、之を護るためには身命を擲つことを少しも避けぬといふのであります。決して一身を輕んずるものではありません。日蓮聖人が、
魚は命を惜む故に、池に栖むに池の淺き事を數きて、池の底に穴をほりてすむ。然れども餌にばかされて釣をのむ。鳥は木に栖む、木の低きことを怖ぢて木の上枝にすむ。然れども餌にばかされて網にかゝる。人もまた是の如し。世間の淺き事には身命を失へども、大事の佛法なんどには捨つる事難し。故に佛になる人もなかるべし。——佐渡御書

と戒められたのを能く味はなければなりません。たゞ身命を輕んずるのが貴いのではなく、大事のために身命を輕んずるのが貴いのであります。

それ故に聖人は龍ノ口の御法難に先つて弟子檀那の人々を勵まして、
各々思ひ切りたまへ、此の身を法華經にかうるは石に金をかへ、糞に米をかうるなり。……佛の使と名乗りながら臆せんは無下の人々なり。

と仰せられたのであります。即ち法華經を弘むるために捨つる生命は少しも惜むに足らぬといふ

ことを教へられたのであります。妙樂大師の涅槃經疏の中に、
身は軽く法は重し、身を死して法を弘む。

とあるのも同じ意であります。孟子が、

志士は溝壑に在ることを忘れず、勇士は其の元を喪ふことを忘れず。

といったのも、決して唯だ身を軽んずることを申したのではありませぬ。道を守るためには死を覺悟しなければならぬとの意であります。斯ういふ覺悟の固い人の力に依つて正法が世に廢れぬのであります。

此の有徳王の如き人と對照を示して居るのは、自分の一身を安全にするために出家した者で、涅槃經の中には之を禿人といつてあります。髪の毛といふものは人の身の飾りでありますから、出家の人が髪の毛を剃るのは世間の名利等を一切捨てたといふ意を現はすためなのであります。然るに髪を剃りながら名利を求めて、一身を安穩にすることばかり考へて居るのは、出家の人とはいはれぬので、禿人といふのであります。斯ういふ者は成るべく世間の有力な人を多く自分の後援者に得たいといふことばかり考へて居ます。併し自分が少しも信仰心のないことは自分でも

よく知つて居りますから、他に正法を弘むるために力を盡して居る人があると、其の人を援助する人が多くなつて、其の爲に自分の生活が立たぬやうになることを恐れて、彼の正法を弘むる者に種々の迫害を加へ、甚しきに至つては之を殺害することまでも企つるのであります。斯ういふ者は貪欲の念が甚しい爲に、自分の妨げになりさうな人に對して怨恨を懷き、出家の身として殺生罪までを犯さうとするので、實に貪瞋癡の三毒を盡く一身に集めたものとも申すべきであります。斯ういふ者を除くのは確かに大なる善事に違ひありません。併し末世になると斯ういふ悪人も随分出ますから、正法を弘むる人は在家の篤志者の保護を頼むより外はないので、其の篤志者が悪人と闘つて之を殺しても、佛は之を殺生罪を犯したものと認めぬと仰せられたのであります。

法華經に云く、若し人信ぜず、此の經を毀謗せば即ち一切世間の佛種を斷ぜん。
乃至、其の人命終して阿鼻獄に入らん。

夫れ經文顯然たり、私の詞何ぞ加へん。凡そ法華經の如くんば、大乘經典を

誹る者は無量の五逆に勝る。故に阿鼻大城に墮ちて永く出づる期無からん。涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供と許すとも謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は必ず三惡道に落つるも、謗法を禁ずる者は不退の位に登る。所謂覺德は是れ迦葉佛なり。有德は則ち釋迦文なり。法華涅槃の經教は一代五時の肝心なり。其の禁實に重し。誰が歸仰せざらんや。

○法華經に云く 前に申した通り法華經譬喩品の偈に、謗法を戒められてある中の一節であります。○阿鼻獄 無間地獄のことでありますが、其の苦が間斷のないので無間と呼ぶるのであります。○五逆の供を許すとも 五逆罪を犯した者に供養することは到底許されないことでもあります。たとひ此の事が許されるとしても、正法の流布を妨ぐる罪は五逆罪より一層重いのでありますから、此の罪を犯した者を保護することは絶対に許されぬのであります。○不退の位 佛は絶対の覺を得られた方でありますから、佛がまた凡夫に戻るなどいふことは決してありませぬ。それ故に佛のことを不退の位と申すのであります。

此處に引かれた法華經譬喩品の文は前にも引いてありましたが、前には淨土宗の人々の誤りを證するために引かれ、此處では謗法の者を殺してもよいといふことの理由として引かれたのであります。出家の人を殺すといふのは容易ならぬことでありますから、特に此の法華經の文に依つて其の實に已むを得ざる處置であることを示されたわけであります。佛の正法の弘まる妨げをするのは大罪中の大罪でありまして、斯ういふ罪を犯したものは無間地獄に墮ちて永く出ること出来ぬといふことを佛が斷定されたのであります。是れほどの大罪人であるから之を殺しても宜しいので、之を殺すのは寧ろ大なる善事として佛に依つて稱讚されて居ます。

但し同じく佛説であつても、其の中の方便の教へといふものは聽く人の機根に應じて説かれたのでありますから、後になれば廢れてしまふものもあるわけであります。然るに佛の眞實の教へといふものは佛の自ら覺られた所を其の儘に説かれたので、これは千萬年を経ても決して廢るべきものではありません。法華經が即ちそれなのであります。天台大師は釋尊御一代の説法を五つの時期に分け、前の四時は皆盡く方便で、唯だ法華經を説かるゝ準備として説かれたものにすぎないと斷定されましたが、是れは天台大師の私見ではなく、釋尊の自ら定められた所に隨はれた

ものであります。而して涅槃經は法華經よりも後に説かれたものでありますが、其の中に説かれたことは法華經以外に一步も出ず、要するに法華經を敷衍されたものに過ぎないのであります。それで天台大師は第五時を『法華涅槃の時』と名けて居らるゝのであります。此の如くに大切な法華經及び涅槃經の中に謗法の罪の大罪であることが説かれてあり、此の罪を犯したものを殺してもよいと断定してあるのでありますから、之を疑ふことの出来るものではありませぬ。

此の謗法の大罪を犯した者が世間の有力者の保護を受けて繁昌して居るのは、佛法の最も衰微した時代といはなければならぬので、斯ういふ時代に多くの不祥な出来事の起るのも少しも不思議ではありません。此の事を知りながら之をいはずに居るのは慈悲の念の足らぬものであるといふ御考へで、日蓮聖人が奮ひ起られたのであります。勿論其の謗法を責むることになれば敵が多くなるのは明かなことではありますが、敵の多くなるのを恐れて、自己の所信を枉げて世間に順つて居るのは佛の思召しに背くことでもあります。涅槃經の中には、
慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり。能く糾治せんは是れ護法の聲聞にして眞の我が弟子なり。彼が爲に悪を除くは即ち彼が親なり。

とあります。人の過を見て之を責めず、強いて之に親しくして居るのは、甚だ慈悲心の足らぬもので、其の人に親しいやうに見せて實は其の人に害をなして居るのでありますから、釋尊は斯ういふ者は自分の弟子ではないと仰せられました。之に反して人の過を責めて其の反省を促すのは、彼に對して眞の親切といふべき行ひで、斯ういふ親切な人を釋尊は自分の眞の弟子であるといつてお褒めになりました。さうして人の過を責めて其の人の罪を除いてやれば、其の人には親と同様な恩人であるとまで仰せられました。日蓮聖人は開目鈔の中に此の涅槃經の語を引いて、自分は此の釋尊の戒めを心に銘して居るから、有らゆる迫害を受くるのを覺悟して、彼の謗法の者に折伏を加へて居るのであると仰せられたのであります。

而るに謗法の族正道の人を忘れ、剩へ法然の選擇に依りて彌愚痴の盲瞽を増す。是を以て或は彼の遺體を忍んで木畫の像に露はし、或は其の妄説を信じて莠言を模に彫り、之を海内に弘め之を廓外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち其の家風、施す所は則ち其の門弟なり。然る間或は釋迦の手指を切りて彌陀の印相を結ばせ、或

は東方如來の雁宇を改めて西土教主の鷲王を居る、或は四百餘回の如法經を止めて西方淨土の三部經と成し、或は天台大師の講を停めて善導の講と爲す。此の如き群類其れ誠に盡し難し。是れ破佛に非ずや。是れ破法に非ずや。是れ破僧に非ずや。此の邪義は則ち選擇に依るなり。嗟呼悲しい哉如來誠諦の禁言に背くこと。哀れなり愚侶迷惑の麁語に隨ふこと。早く天下の靜謐を思はゞ、須らく國中の謗法を斷ずべし。

○彼の遺體を忍んで 法然上人が死んだ後でも、其の姿を重んじて畫にかいたり或は木像に刻んだりして之を崇めるのであります。○模に彫り 選擇集を書物にして出版したことを申すのであります。○廓外に翫ぶ 廓とは都の境のことで、廓外とは都より外の全國各地のことです。○其の家風 阿彌陀佛の信仰することであり、念佛の僧等に布施をして、其の法を弘むることを助ける人が多いのであります。○釋迦の手指を切りて彌陀の印相を結ばせ 阿彌陀佛の信仰が盛んに

なると共に、前にあつた釋迦牟尼佛の御像を阿彌陀佛の御像に作りかへたものが少くなかつたのであります。何れの佛でも其の印相といふものがそれ／＼異ひます。印相といふのは御手の指の結び方がそれ／＼に異ふので、之に依つて其の佛の特に力を用ゐられたことが表現されて居るわけであり、それであり、釋迦牟尼佛の御像の指を切り取つてしまつて、阿彌陀佛の印相を結んだ指と取り換へれば、それで阿彌陀佛の御縁に改造することが出来たわけであり、○東方如來の雁宇 藥師如來は東方淨瑠璃世界の教主でありますから東方如來と申したのであります。雁宇といふのは御堂のことであり、○西土教主の鷲王 三十二相の一つに、佛の手足の筋が細かな網目のやうになつて居るのは鷲鳥の足の筋と同様であるといふことがあります。之に依つて佛のことを鷲王と申します。西方極樂淨土の教主たる阿彌陀佛のことを申すのであります。○四百餘回の如法經 慈覺大師が叡山の横川に於て法華經を書寫し、之を安置した堂を如法堂と名けました。此より後は法華經を書寫するのを如法經と呼ぶことになりました。其の時から法然上人の頃まで凡そ四百年になります。四百餘回の如法經を止めるといふのは、四百年も續いて來た法華經の書寫を止めることでもあります。○三部經と成し 法

華經を書寫するかはりに淨土三部經の書寫が行はれたのであります。○天台大師の講 毎年十一月二十四日は天台大師の御命日でありますから、大師の御像の前で法華經や摩訶止觀を讀んで報恩の意を表するのを大師講と申します。これは傳教大師が始められて、其の後次第に廣く行はれるやうになりましたのを、法然上人の頃から止めたのであります。○善導の講 毎年二月十四日が善導和尚の命日でありますから、大師講の代りに此の日に善導講を催すことになつたのであります。○如來誠諦の禁言 諦とは確かで間違ひがないことであります。釋尊の仰しやつたことは盡く眞實で間違ひがないのであります。釋尊は決して法華經を輕んじてはならぬといふことを繰返して戒められました。

法然上人が專修念佛を唱へてから此の立正安國論の書かれるまで凡そ八十五年を経て居ますが、此の間に淨土宗の勢力が日本全國を風靡し、他の諸宗が盡く之に壓倒されたさまは、此處の記事に依つて能く愈されて居ます。隨つて其の法華經弘通の妨げを爲したことの最も甚しかつたことも察せらるゝわけであります。抑も欽明天皇の十三年に百濟の聖明王から佛像と經論とを獻じたことは、吾が國に佛教の弘まる本となつたもので、吾々佛教徒に取つては永く忘るべからざ

る事であります。佛教はその以前から吾が國に或る程度まで弘まつては居りましたが、此の時に百濟の王から吾が朝廷に公式に佛教を傳へたのでありますから、是れは最も重大な事と申すべきであります。而して此の時に傳へられたのは釋尊の御像でありまして、此の時から吾が國では上下共に釋尊の御恩に浴して居るわけであります。然るに淨土宗が普及するに及んで釋尊の御佛を阿彌陀佛に作り變へることが盛んに行はれたといふのは、あまりに佛恩を無視した事と申さなければなりません。日蓮聖人が大に憤慨せられたのも尤もな次第であります。

また傳教大師が南都七大寺の碩學と對論して法華經が最勝の經であることを認めさせて以來、叡山が吾が國の佛教の中心となつて居たので、傳教大師の御徳といふものはまことに洪大なものであります。これは何人も共に認めなければならぬ所でありまして、傳教大師の始められた天台大師の講といふものも全國に廣く行はれて居ましたが、淨土宗が盛んになると共に全く廢れて、其の代りに善導講が行はれるやうになりました。又慈覺大師が始められて四百年以上續いた法華經の書寫も廢れてしまひました。此等の事は法華經を信する者に取つては、何にも換へられぬほど残念な事でありまして、勿論叡山に於ても傳教大師の御精神は殆んど失はれ、また諸寺で法

華經の讀誦されるのも唯形式的のものになり果てたのでありますが、それでも全く廢れたよりも
どれ程優つて居るか知れませぬ。論語に、

子貢告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く賜や、汝は其の羊を愛す。我は其の禮を愛す。

といふことがあります。告朔の餼羊といふのは毎月朔日に諸侯が其の祖先の廟に羊の蒸したのを
供へて祭りをするので、周の時代の初めから定まつた禮となつて居りました。然るに孔子の頃
はそれが唯だ形式的のものになりまして、毎月朔日に羊は供へるけれども、諸侯は自ら其の式に
列ることもいたしませんでした。それ故に子貢は、斯ういふ形式的の事は止めてしまふ方が宜い
と申したのであります。併し孔子は單に形式だけでも其の禮の保存されて居るのは、全く廢れた
のよりは優つて居るから、止めるには及ばぬと申されたので、孔子の禮を重んぜらるゝ情がよく
現はれて居ます。精神の伴はぬ形式はまことに詰まらぬものゝやうであります。其の形式さへ
も廢れてしまふのは更に悲しむべきことであります。日蓮聖人が種々の事實を擧げて、吾が國の
佛教の亂れ果てたさまを歎かれたのも、まことに道理のあることであります。

客曰く、若し謗法の輩を斷じ、若し佛禁の違を絶せば、彼の經文の如く斬罪に
行ふ可きか。若し然らば殺害相加はり罪業何んかせんや。則ち大集經に云く、剃頭
して袈裟を著たるものは持戒及び毀戒、天人彼を供養す可し。則ち爲れ我を供養す
るなり。彼は是れ我が子なり。若し彼を搦打するは則ち爲れ我が子を打つなり。若
し彼を罵辱するは則ち爲れ我を毀辱するなりと。料り知んぬ、善惡を論ぜず是非を
擇ぶこと無く、僧侶たるに於ては供養を展ふ可し。何ぞ其の子を打擲して忝く
も其の父を悲哀せしめん。彼の竹杖の目連尊者を害せしや永く無間の底に沈み、提
婆達加が蓮華比丘尼を殺せしや久しく阿鼻の焰に咽ぶ。先證斯れ明かなり、後昆最
も恐れあり。謗法を誡むるに似て既に禁言を破る。此の事信じ難し、如何してか意
を得ん。

○罪業何んかせん 兎にも角にも僧侶の姿をして居る者を殺すのは大なる罪であるといふこと

は、下に引いた大集經にいつてある通りであります。○持戒及び毀戒 佛の戒を守つて居る者でも、或は戒律を破つた者でも、何れでもといふ意であります。○天人彼を供養すべし 天上界の者も人間界の者も、共に僧侶に供養すべきであるといふのであります。○竹杖 其の頃婆羅門教徒の中に甚だ凶暴なものがあつて、常に竹の杖を携へて市中を横行し、自分の敵と思ふ者に逢へば其の竹の杖をもつて打つて懸り、時には其の人を打殺すこともありました。それで世間で此の類の者を竹杖外道と呼んで居りました。○目連尊者を害せしや 目連が羅閱城といふ都に入つて來たのを彼の竹杖外道が見て、群を爲して之を襲うて遂に之を打殺したのであります。○無間の底に沈み 彼の外道等は目連のやうな賢者を殺した報として、無間地獄に墮ちたと傳へられました。○提婆達多 釋尊の從弟でありましたが、自ら一派を立て、釋尊に對抗し、常に佛教に多くの迫害を加へて大なる罪を作りました。○蓮華比丘尼を殺せしや 提婆達多は阿闍世王を説き惑はして種々の罪を作りましたが、阿闍世王は後に至つて其の罪を悔み、熱心な釋尊の歸依者となりましたので、或る時提婆が王宮へ參つた時に面會を謝絶しました。提婆は大に憤慨して王宮の外へ出てから散々に王を罵りました。之を蓮華比丘尼が聞いて

提婆に向ひ、其の多くの大罪を犯して居るのを責めましたので、提婆は非常に怒り、蓮華比丘尼を撲ち殺してしまひました。○後昆最も恐れあり 後昆とは子孫のことでありましたが此處では後世といふ意味なので、後世になつても僧侶を殺すことなどは避けなければならぬといふのであります。

此より第八段の問答に入つて如何にして、謗法の徒に制裁を加ふべきかを明かにされるのであります。日蓮聖人が諸經を引いて謗法の徒が死に處せられた前例を示されたのは、謗法の罪の至つて重いことを明かにせんが爲であつて、必ずしも昔の處置に倣はなければならぬといふ御考へでなかつたことは之に依つて明白になりました。其の目的は佛の正法の弘まる妨げを除くことに在るのでありますから、此の目的が達しられさへすれば宜いのであります。凡て罪を犯した者に制裁を加へるのは、其の害の世間に及ぶのを防ぐためなので、其の人を憎むが爲ではありません。惡を爲す者は要するに正しい思慮分別の足らぬ者なのでありますから、寧ろ憫れむべきものであつて、決して之を憎むべきではありません。されば涅槃經には、

若し諸の衆生我が身を斫伐し、手足頭目支節を斬截すとも、當に是の人に於て大悲を生ずべ

し。
といつてあります。大悲を生ずるといふのは其の愚を憫れむことでもあります。悪人は決して憎むべきではありませんぬけれども、其の害の世間に及ぶのを防ぐために、之に對して然るべき制裁を加へなければならぬのは勿論のことです。

また大集經の中に、僧侶たる者は假令破戒の者であつても之を供養しなければならぬと説かれてありますのは、法を重んじなければならぬといふ御精神から出たものであります。誰でも良い教へを聽かなければ其の心の迷ひを除くことは出來ないのでありますから、如何なる人でも良い教へを傳へてくれる人は之を重んじなければなりません。狐が井の中に陥つて死せんとした時に、世の無常を觀じていつた事を、帝釋天が遙かに天上から聞いて、態々下りて來て其の狐を禮拜し、恭しく其の教へを受けたといふことがあります。教へといふものは此の如くに貴いものであります。されば破戒の僧が自身に實行し得ぬことを説いても、それが佛の貴い教へであれば、之を敬つて聽いて、其の教へを實行すべきであります。孔子は、
人を以て言を廢せず。

と教へられました。其の人が善人でなくても其の言つたことが正しければ、之を聽いて自ら之を實行すべきであるといふことで、佛教を學ぶ者も亦此の心懸けを失つてはなりません。

但しこれは教へを受くる者の心得として説かれたのでありまして、斯ういふ説のあるのを恃んで、自ら實行の出來ぬことを説くのはまことに恥かしい事と考へなければなりません。釋尊は御弟子に訓練を與へらるゝこと十五ヶ年の後に至つて、初めて其の中の重立つた人々を諸國へ遣はして佛教の弘通に力を盡さしめられたといふことであります。人に對して教へを説くのは非常に責任の重いものであることを決して忘れてはならぬのであります。されば孔子も、
道に聽いて塗に説くは徳をこれ棄つるなり。

と戒められました。道側で聽いたことを其のまゝ又道側で人に説いて、少しも自分で之を實行せぬやうでは本當の學問ではないといふのであります。誰のいふことでも善い事は謹んで聽くべきであります。また人に對して説く人は自分の實行の出來ぬことを説かぬやうに、互ひに反省することが極めて大切なのであります。

主人曰く、客明かに經文を見て猶ほ斯の言を成す。心の及ばざるか、理の通ぜざるか。全く佛子を禁むるに非ず、唯だ偏に謗法を惡むなり。夫れ釋迦以前の佛教は其の罪を斬ると雖も、能仁以後の經説は則ち其の施を止む。然らば則ち四海萬邦一切の四衆、其の惡に施さずして皆此の善に歸せば、何の難か並び起らん、何の災か競ひ來らん。

○全く佛子を禁むるに非ず。僧侶が眞に佛子と呼ばれて宜いやうな行ひをしてさへ居れば之に對して何も制裁を興へる必要などはないのであります。○偏に謗法を惡むなり。僧侶でありながら正しい教への世に弘まるのを妨げるのは不都合なことであるから、之に制裁を興へて其の非を改めさせ、又其の害の世間に及ぶのを防がうといふのであります。○釋迦以前の佛教彼の涅槃經に出て居る例は遠い昔のこと、釋尊が御出現になつたのより以前の事實なのであります。其の頃の國王が佛敎の妨げをした者を死刑に處したといふのであります、其の通りに做ふには及ばないのであります。○能仁以後の經説。能仁とは釋迦といふ語の譯であることは

前に申しました。釋尊が世に御出現になつてから後に、佛敎の敵となつた者が如何に多くても、それを殺して宜いといふことは經典の中に説かれて居りませぬ。○其の施を止む。邪法を唱ふる僧侶に布施することを止めれば宜しいと申すのであります。前に出て居ました涅槃經の文に、一闍提には布施をしてはならぬとある通り、布施をしなければ邪法は必ず行はれなくなります。僧侶は自分で生計を立てることの出來ぬものでありますから、誰も之を保護する者がなくなれば其の一切の働きは止つてしまふのであります。それ故に國家の命令として、邪法を唱ふる者に一切保護を興ふることを禁止するのが最も良い處置なのであります。

茲に至つて邪法を禁遏すべき方法が明かに示されて居ります。即ち邪法を唱ふる者に保護を興へなければ、自ら其の勢力は無くなつてしまふのであります。僧侶が其の寺を維持するには檀家の援助といふものが必要なので、僧侶は自分で其の生活の資を得ることが出來ないのでありますから、布施する人がなければ法を弘むることは出來ませぬ。物を施すのを財施といひ、教へを興ふるのを法施といふので、僧侶は財施を受けて法施を興ふべきものであります。釋尊の御在世に於て佛及び佛弟子に種々の物を供養した者は、何れも佛及び佛弟子の敎化の御働きを助けたも

のでありますから、まことに大なる功德であります。釋尊は永く末世の衆生を救護することを目的として貴い教へを説き遺されたのでありますから、此の貴い教へを世に弘むる人に種々の物を供養する功德は莫大で、即ち間接に一切の人を救ふ働きをして居るわけで居ります。それで法華經には此等の人を稱めて、

此を以て現前に我及び比丘僧に供養するなり。——分別功德品
とあります。即ち直推に釋尊や御弟子達に供養するのと少しも變らぬと仰せられたのであります。

日蓮聖人も檀家の人々から種々の物を御送り申したのに對して、いつも懇ろに御禮を述べられました。それは皆法華經の流布を助くるものであるといふ御心持で、深く之に感謝されたのであります。例へば、

種々の物送り給ひ候ひ畢ぬ。山中の住居思ひ遣らせ給ひて、雪の中を踏み分けて御訪ひ候事、御志定めて法華經十羅刹も知しめし候らん。——松野殿御返事
とか、若くは、

欠

欠

に、善も積まざれば以て名を成すに足らず。悪も積まざれば以て身を滅すに足らず。小人は小善を以て益なしと爲して爲さず、小悪を以て傷むこと無しと爲して去らず。故に悪積りて掩ふ可からず、罪大にして解く可からざるなり。

とあるのは真に良い教訓と申すべきであります。法句經の中には、
妖蕪にして福を見るは其の惡未だ熟せざればなり。其の惡熟するに至りて自ら罪虐を受く。
貞祥にして禍を見るは其の善未だ熟せざればなり。其の善熟するに至りて必ず其の福を受く。

とあります。妖蕪といふのは惡事の少しく兆したことで、この時に戒めないと其の惡が漸く長じて大なる禍を受くるやうになるのであります。善に對する報も矢張り其の通りであります。それ故に尙ほ之に續いて、
小善を輕んじて以て福無しと爲すこと莫かれ。水滴微なりと雖も漸く大器に盈つ。凡そ福の充滿するは纖々より積む。

と申してあります。吾々は此等の教へをよく眼膺して、正法の興隆に大に力を盡さなければなりません。

汝早く信仰の寸心を改めて速かに實乗の一善に歸せよ。然らば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや。十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微無く土に破壞無くんば、身は是れ安泰にして心は是れ禪定ならん。此の詞此の言信ず可し崇む可し。

○實乗の一善 法華を實大乘といふので、善とは完全無缺なことであります。完全無缺な教へといふものは此の法華經一つに止まるのであります。○三界は皆佛國 三界とは欲界と色界と無色界で、欲界とは身體があり欲望をもつた者の住む世界。色界とは身體があつても欲望のない者の住む世界。無色界とは身體がなくして精神のみをもつた者の住む世界で、要するに三界とは生命を有する者の全體を申すのであります。法華經を信する者は心の中に全く煩惱がありませんから、法華經が普く弘まりさへすれば、何處も皆佛國になつてしまふわけであります。

○心は是れ禪定 心に少しの動搖もなく、絶対に平和を得ることです。○信ず可し崇む可し これは佛の御言葉に基いていふのであるから、絶対に之を信じなければならぬのであります。

此の結論に至つて前に申した『娑婆即寂光土』の思想が遺憾なく現はれて居ます。吾々は淨土を東方にも西法にも求むるには及ばぬ、此の娑婆世界に淨土を實現するために努力すべきであります。人々が煩惱に充ちた心を以て相對して居るから、此の土が娑婆なのであります。人々の心が皆淨らかなれば此の土は淨土に變化すべきであります。凡ての人の心が清淨になるのは容易なことではありませぬが、各自が一人づゝ此の心懸けをもつて世に立てば、自ら其の周圍の人々をも感化して、此の娑婆を淨土とすべき機運がそこから開けて來るのであります。天台大師は、豈に迦耶を離れて別に常寂を求めんや。寂光の外に別に娑婆有るにあらず。——法華文句と仰せられました。迦耶といふのは吾々の身體のことです。常寂といひ寂光といふのは佛の住みたまふ淨土のことです。吾々は此の肉身を具へて此の娑婆世界に住みながら、毎日此處に淨土を實現しようといふ考へで信心を勵むべきであります。

吾々が此の法華經を讀むことの出来るのは實に不思議の縁と申さなければなりません。就ては此の縁を空しくせぬやうに努めなければならぬのであります。正しいことは必ず最後の勝利を得べきでありますから、最初から志を同じうする人の多く出来るのを望むには及びませぬ。『自分一人でもよい』といふ決心で正しい信仰を勵んで居れば、決して何時までも一人のみで居ることはないものであります。孔子の高弟の顔淵が仁を實行すべき道を問ひました時に、孔子は之に答へて、

己おのれに克かち禮れいに復かへするを仁にんと爲なす。一日いちじつ己おのれに克かち禮れいに復かへすれば天下てんか仁にんに歸きす。仁にんを爲なすことは己おのれに由よる、人ひとに由よらんや。

といはれました。一人が善い行ひをして直ぐに天下の人が之に倣ふといふことはあり得ませんけれども、天下の人を皆善くする其の本は一人なのでありますから、天下の人を皆善くする根本を作るのであるといふ自信をもつて、自分の行ひを善くすべきであります。維摩經の中に、直心ちしんは是これ菩薩ぼさつの淨土じやうどなり。

とあるのも、一人の心を直くするのが淨土を實現する本になるといふ意であります。法華經を信

するものは皆此の決心をもたなければならぬので、此の決心さへ堅固であれば、如何なる困難をも凌いで行かれぬ筈はありませぬ。

客かく曰いく、今生こんじやう後生ごじやう誰たれか慎つしまざらん、誰たれか和わせざらん。此この經文きやうもんを披ひらいて具ぐに佛語ぶつごを承うけたまはるに、誹謗ひぼうの科か至いたて重おもく毀法きほふの罪誠つみまことに深ふかし。我われ一佛いっぶつを信しんじて諸佛しよぶつを抛なげち、三都經さんぶきやうを仰あふいで諸經しよきやうを閣さしおしは、是これ私曲しきよくの思おもひに非あらず、則すなはち先達せんたつの詞ことばに隨したがひしなり。十方じふぱうの諸人しよじんも亦復またまた是この如ごとくなるべし。今世こんぜには性心しやうしんを勞らうし來生らいじやうには阿鼻あびに墮だせんこと、文明もんあきかに理詳りつじやうなり。疑うたがふべからず。彌貴公いよくきこうの慈誨じかいに仰あふいで益ます愚客ぐかくの癡心ちしんを開ひらけり。速すみかに對治たいぢを回めぐらし早はやく泰平たいへいを致いたし、先まづ生前せいぜんを安やすんじ更さらに没後もつごを扶たすけん。唯ただ我わが信しんずるのみに非あらず、又また佗たの誤あやまりを誡いましめんのみ。

○誰か和せざらん 現世も未來も安穩であることを望むのは、凡ての人の一致する所であります。○一佛を信じて 阿彌陀佛のみを信じて居たことあります。○先達の詞 淨土宗の先輩

たる曇鸞とか道綽とか善導とか、乃至は法然とかいふ人々の説を信じたのが誤りであつたのであります。○後後を助けん 後後とは未來のことで、未來の成佛を期するために正しい信仰に入らうといふのであります。

日蓮聖人の言に客が歸服したといふことで此の立正安國論の全體が終るのでありますが、其の誤りの由つて來る所を顧みて『是れ私曲の思に非ず、先達の詞に従ひしなり』とあるのは大に注意すべき語であります。一人の正しい説が多くの人を正しくし、一人の誤つた説が多くの人を誤りに陥れるのでありますから、互ひに深く自ら戒めなければなりません。提婆達多は釋尊の從弟でありましたが、種々の事に就て釋尊と競争して一度も勝てなかつたので嫉妬の念を増長させ、自ら一派を立て、釋尊と對抗したのであります。此の提婆達多の邪説に惑はされて悪行を積み、世間に害を爲した人がどれ程多かつたか知れませぬ。是れは一人の影響が大きいものであるといふ事の最も著しい例であります。其の程度に差があつても、全く其の周圍に影響を及ぼさぬ人は無いのでありますから、互ひに自分の責任の重いことを深く考へなければならぬのであります。

又此の客の言に『唯我が信するのみに非ず、又佗の誤を誠めん』とあるのは貴い言葉であります。自分が邪説に惑はされて居たことを後悔すると共に、自分と同じやうに邪説に惑はされて居る人の世間に多いのを悼んで、此等の人を覺醒させるために力を盡さうと誓つたのは、美しい人情の發露と申すべきであります。

心こころあらむ人に見せばやひとよし野の吉野の山の春のあけぼの

といふ古歌がありますが、自分が春の曉に吉野の山に登つて、朝日に匂ふ花の美しさを賞すれば、此の美しい景色を人々にも見せてやりたいといふ情が起るもので、斯ういふ情が起らぬやうでは眞に風流を解し得た人とはいはれませぬ。所謂菩薩行も要するに之と同じ人情から生れたもので、佛の教へを聽いて一切の煩惱を除き、其の心に眞の平和を得たものは、此の悦びを吾一人に私するに忍びず、之を多くの人に頒たうといふ念が起つて、此の貴い佛教を普く世間に弘むるために力を盡さうといふ志を立つるに至るのであります。

佛の大慈悲は彼此と申すにも及ばぬことでありますが、斯ういふ優しい心から佛の御化導を助くる志を立てた人も眞に貴い人と申さなければなりません。法華經の化誡論品には多くの梵天王

が佛前に於て其の歸依の心を告白しました佛の説法を懇請したことが記されてありますが、其の説いた偈の中に、

願はくは此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん。

とあります。吾々も此の理想をもつて共に法華經の信心を勵みたいものであります。

以上を以て立證安國論の全體を終りますが、此の中に豫言せられたことが的中しましたので、日蓮聖人は文永六年十二月に至つて、此の立正安國論の後記を作つて之を後に遺されました。因て此の後記の文をも併せて載することにいたします。

文應元年太歲之を勘ふ。正嘉より之を始め、文應元年に勘へ畢る。去ぬる正嘉元年太歲八月二十三日戌亥の尅の大地震を見て之を勘ふ。其の後文應元年太歲七月十六日を以て宿谷禪門に付して最明寺入道殿に獻じ奉り。其の後文永元年太歲七月五日大明星の時彌々此の災の根源を知る。文應元年太歲より文永五年太歲後の正月十八日に至るまで九箇年を経て、西方大蒙古國より我が朝を襲ふ可きの

由、牒狀之を渡す。又同六年重ねて牒狀之を渡す。既に勘文之に叶ふ。之に準じて之を思ふに未來も亦然る可きか。此の書は徵有る文なり。是れ偏に日蓮の力に非ず、法華經の眞文聖の感應する所か。

文永六年太歲己巳十二月八日之を寫す。

○之を勘ふ 諸經を考證して此の立正安國論を作つたことをいふのであります。○戌亥の尅 今の午後八時から十時までの間をいふのであります。○後の正月 閏正月のことです。○未來も亦然る可きか 正しい信仰が廢れて居れば現世が安穩でないのだから、之に依つて未來のことを推すると、未來にも必ず惡報があることは明かだといふのであります。○徵有る文 事實が現はれて、立正安國論に説かれたことの誤りでないことを證したのであります。○法華經の眞文 法華經は佛の眞實の教へでありますから、其の文に示された所は一々正しいのであります。○聖の感應する所 日蓮聖人は深く法華經を信じて居られたから、佛の御力が聖人の心に感應して、國難を前知する力が聖人に具はつたのであります。

此の文は立正安國論選述より十年目の文永六年に書かれたものでありますが、立正安國論の中に豫言せられた所は少しも誤りなく、文永五年閏正月に至つて蒙古より脅迫的の國書が到來したことは前に申した通りであります。此の國書に對しては北條時宗の意見に依つて返書を遣はされず、専ら開戦の準備に力を用ゐることになつたのであります。翌文永六年になつて再度の國書が來ましたので、聖人は愈々大事の切迫して來たことを知つて、此の後記を作られたのであります。勿論此の立正安國論は北條時頼の許へ提出された以外に寫しを作つて置かれたので、其の寫しに此の追記の文を記入して、之を後に遺されたものと思はれます。

聖人は自分の豫言の中つたのは信仰の力であるといふことを記して居られますので、法華經を固く信ずるために、佛の御力が自分に宿つて居るといふのは聖人の終始一貫したる御確信でありました。法華經の法師品にも末法の世に出て此の經を弘むる法師の徳を稱へて、
當に知るべし是の人は如來と共に宿するなり。

とあります。此の確信があつてこそ有らゆる艱苦の中を越えて行くことが出来るのであります。撰時鈔に、

靈山淨土の教主釋尊、寶淨世界の多寶佛、十方分身の諸佛、地涌千界の菩薩等、梵釋日月四天等、冥に加し顯に助け給はずば、一時一日も安穩なるべしや。

とありますのも、亦同じ御信念を披瀝されたものであります。常に佛と共に居るといふ確信ほど力強いものではありません。此の確信さへあれば世の中に何も恐ろしいものではありません。吾々も此の確信を得るまで信心を勵んで行かなければならぬのであります。

收 結

立正安國論といふ名は日蓮聖人の御撰述になつたもの以外にはありませぬが、立正安國といふ精神は、聖徳太子以來吾が日本國の佛教を一貫して居るものと申すべきであります。國を安んずるためには人の心を正しくしなければならず、人の心を正しくすることは正しい教への力に依らなければならぬのであります。此の大切な點に御着眼になつたのが聖徳太子でありまして、太子は日本國全體の心を正しくする力を佛教に御求めになつたのであります。太子は御歳二十一の時に攝政の大臣に御當りになり、御歳四十九で薨去になつたのであります。それは内外共に最も多事な時代でありました。先づ國內に於ては蘇我とか物部とかいふやうな豪族が勢力をもつて居まして、その間に絶えず勢力争ひが行はれ、朝廷の百官を始め地方の役人までも其等の豪族の何れかに結び付いて戻らなければ其の地位を保つて行くことが出来ないといふくらゐでありました。それで勢力のある豪族はそれづくに黨を作つて相對立して居まして、互ひに黨あることを知

つて國あることを知らぬといふ有様でありました。太子の御作りになつた憲法の第一條に、

ひとみなたうあ
人皆黨有り、またたしあすくな
亦達者少し。

とありますのは、其の當時の實狀であつたのであります。達者といふのは正しい道を心得た人のことですが、人々は皆正しい道を辨へず、たゞ黨を作つて勢力を争ひあふばかりでありました。斯ういふことで國が盛んにならう筈はありません。

また外國との關係はと申しますと、支那の勢力が既に朝鮮を壓迫し、場合に寄つては吾が國へも壓迫を加へて來やうといふ形勢でありました。支那は久しく統一を失つて、幾つかの國がいつも對立して居ましたが、南方の隋といふ國が非常に強力になりまして、太子が攝政におなりになる五年前に支那全體を統一いたし、朝鮮も全く其の勢力の下に屈伏してしまひました。それで若し吾が國に隙間があれば、吾が國へも壓迫を加へて來やうといふ形勢なのでありますから、吾が國に於ては協力一致して國を護り、國力を充實させるといふことが何より急務であつたのであります。然るに前に申すやうに國內に於て幾つかの黨が對立して勢力を争つて居るのでありますから、協力一致の實を擧げることなどは思ひも寄らぬのであります。斯ういふ非常に困難な時に聖

徳太子は攝政の任にお就きになつたのであります。太子は此の場合に於ては、人々をして私の心を捨てさせるやうに之を教へ導くより外はないと御決心になりました。

勿論今日とちがひまして其の當時に於ては一般人民の思想の程度は非常に低く、何事も朝廷の百官や地方の役人の指圖通りに行はれて居たのでありますから、其等の人々の心が正しくさへなれば國は必ず盛んになるに相違なかつたのであります。然らば如何にして其の心を正しくすべきかといへば、最も善い教への力に依るより外はないのであります。教へにもいろ／＼ありますが、太子は佛教が最も勝れた教へであるといふことを固く信じて居られました。それ故に太子は佛教を盛大にして、佛教の信仰を以て全體の思想を統一することが、人々をして私の心を捨てさせるのに最も善い道であるといふ方針をお定めになり、佛教の興隆に全力を御注ぎになつたのであります。太子は御生涯の間に七つの寺を御建立になり、又諸國に寺を建立するのに御援助をお與へになりましたが、佛に對して一身一家の福を祈ることを決して御獎勵になつたのではなく、佛教を信ずることに依つて各自が私の心を去ることを御獎勵になつたのであります。

太子の御作りになりました憲法は臣たるの道を根本的に御教へになる爲でありましたが、其の

第一條には、

和を以て貴しと爲す。

とありまして、其の第十五條には如何にして和衷協力が出来るかといふことを御示しになるために、

私に背き公に向ふは臣の道なり。

とあります。然らば如何にして私に背き公に向ふ心を作り上ることが出来るかといへば、それは佛教の信仰に依るより外はないので、憲法の第二條に（これは前にも引きましたが）

其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直うせん。

と御示しになつてあるのであります。人の本性に背いたのを『枉れる』と仰せられたので、其の枉れる心を直くするためには佛法を學ぶのが最も善い道であると申すのであります。

太子はまた親しく朝廷の百官のために三部の經典を御講じになりました。その三部とは維摩經と勝鬘經と法華經とであります。又太子は此の三部の經典の註釋を御作りになつて之を後世に御遣しになりました。即ち維摩經義疏、勝鬘經義疏及び法華經義疏でありまして、三書共に皆缺く

る所なく今日に傳はつて居ります。而して此の三部の中で何れを最も重んぜられたかと考へて見ますと、法華經を最も重んぜられたことは三經の義疏を比べて讀んで見れば極めて明かであります。又日本書紀の推古天皇十四年の下に、

是の歳皇太子また法華經を岡本の宮に講ず。天皇大に之を喜び、播磨の國水田百町を皇太子に施す。

とあります。太子が法華經を講ぜられたのを推古天皇が特に喜びになつたのは、太子が特に此の經に力を打込んで講ぜられたからであらうと拜察せられます。太子の法華經義疏の中に、

惣じて萬善を取り、合して一因と爲す。

と申す語があります。一因とは此の娑婆世界に淨土を實現する原因といふことであります。前に申しました通り、人々の心が皆清淨になれば此の娑婆が變じて淨土になるのであります。凡ての善事は皆此の娑婆を淨土にする因となると思つて互ひに勵みあはなければならぬといふ御教へであります。斯ういふ御趣意で法華經を講ぜられたのでありますから、推古天皇も御満足になつたのでありませう。

太子の二十九ヶ年に亘つての御努力は著々として其の效を奏し、人々が相協力一致してそれぞれの業に力を盡したので、吾が國の國力は非常に充實し、國勢は著しく盛んになりました。それで朝鮮からは今まで不和であつた新羅と任那とが聯合して使者を吾が國に送つて貢物を獻じ、今より毎年貢物を絶やすまいといふ誓ひを立てました。又隋でも吾が國の實力を認めたと見えまして、吾が國から小野妹子を遣つたのに對して答禮使をよこし、對等の交際をすることにりました。吾が國からの國書の劈頭に、

東の天皇敬ひて西の皇帝に白す。

とありますのは全く兩國が對等であるといふことを現はしたものであります。此より後に隋が亡びて唐が起つてからも吾が國との交通は絶えませんでした。聖德太子は實に佛法を御興隆になつて吾が國の國力發展の基礎を固うせられましたので、『立正安國』の範を御示しになつたものと申すべきであります。

推古天皇も太子と全く同じ御考へであつて、佛教の興隆に力を御盡しになりました。それより後歴代の皇室に於かせられて何れも佛教に厚き御保護を御加へになりましたので、佛教は益々盛

んになりましたが、皇室より佛教に御保護を御與へになつたのは佛教によつて國民の心を正しくし、協力一致の實を挙げしめて、國力を發展せしめようといふ御趣意であつたと拜察せられます。其の一二の例を申して見ますと、聖武天皇は光明皇后と力を御協せになつて佛教の興隆に特に御盡しになり、有名な奈良の大佛も天皇の御代に出來たのであります。天平二十一年四月に天皇が皇后皇太子をはじめ群臣を率ゐて大佛殿に行幸になつた際に、左大臣橘諸兄に命じて佛前に於て詔を讀ませられました。其の詔の中に、

御世重ねて明く清き心をもて仕へ奉る事に依りてなも、天日嗣は平らけく安らけく聞し召し來る。此の辭忘れたまふな、棄てたまふな。

と申すことがあります。多くの臣下が明るく淨らかな心を以て君に仕へれば、國は安らかなるのであるから、此の事を忘れてはならぬと仰せられたのであります。斯ういふ詔を佛前に於て讀ませられたのは、人の心を明るく淨くするために佛教を盛んにするのであるといふ御趣意を御發表になるためであつたと存ぜられます。

また聖武天皇の御時に諸國に國分寺を置かれたことも能く知られて居りますが、天皇十三年三

月に此の國分寺をお建てになる御趣意を御示しになる爲の詔には、
朕薄徳を以て、恭しく重任を受く。未だ政化を弘めず、寤寐に慚多し。古の明王皆能く光業あり、國泰く人樂み災除き福來る。何をか修め何をか務めて能く此の道を致さん。

とありまして、之に續いて國を安らかにするために國分寺を建てるといふことを極めて懇切に御述べになつてあります。それで最初の御計畫では全國に國分寺と國分尼寺とお建てになるといふことであります。併し國分寺は六十六ヶ國に殆んど漏るゝ所なく建ちましたが、國分尼寺の方はあまり普及しないで終りました。其の頃は各國の國司の居る所を國府といひました。國分寺は國府または其の近邊で形勝の地を擇んで之を建て、國司廳は政治の中心、國分寺は教化の中心として相並んで居りました。此の國分寺の住職は僧綱といふのでありますが、僧綱は皆朝廷より任ぜらるゝので、たゞ佛教の事に精通して居るのみでなく、何事につけても其の地方の人民の指導者となるだけの力のある人が之に任ぜられたのであります。斯様に寺といふものを中心として各地方の教化を盛んにし、國民に皆各自の業を勵む氣風を作らせようといふのが聖武天皇の御趣意でありまして、これも亦『立正安國』といふことに外ならぬのであります。

其の後桓武天皇の御代に至つて、傳教大師が叡山を開いて法華經の弘通に努めたことは前に申しましたが、大師は法華經と仁王經と金光明經とを並せて鎮護國家の三部經と名けまして、此の三部の經典を常に叡山に於て讀誦せしめ又講說せしめたのであります。仁王經も金光明經も佛の正法を基礎として政治の行はるゝ國の永く榮えて行くべきことを説かれた經であります。大師は桓武天皇の御信任あつく、又萬民に歸依せられまして、叡山は吾が國の佛教の中心となつたのであります。其の主義とする所は佛教の信仰に依つて人の心を正しくし、國の永く繁昌する基礎を固めようといふことであります。矢張り歸する所は『立正安國』といふことであります。

其の僧徒教育の大綱を示した『山家學生式』には、
佛法世に久しく國家永く固くして佛種絶えざらん。

とあります。また其の遺誡の中には、
佛法を紹隆して以て國恩に答ふべし。

とあります。殊に注意すべきは其の遺誡の中に、
我鄭重に此間に託生して、三學を習學し一乘を弘通せん。若し心を同じうする者は道を守り道

を修し、相思ひ相待て。

といふ一條のあることであります。鄭重には『幾度も』といふこと、此間とは此の日本の國のことで、大師は幾度も此の日本の國に生れて來て法華經を弘めるために力を盡さうといふ遺言をされたのであります。

以上は僅かに一二の事實を挙げたに過ぎませぬが、吾が國の佛教の發展して來た過程はほゞ是れでわかるであらうと思ひます。日蓮聖人が立正安國といふことを唱へられた御精神は此の立正安國論を精讀して見れば明かにわかると思ひます。聖人は日本が世界萬邦に勝れた國であるといふ確信をもつて居られました。其の當時には種々の缺點がありましたので、聖人は少しも遠慮せず、一々厳しい批判を加へられましたけれども、日本といふ國の本來の性質は、他の何れの國も到底比べることの出來ぬほど、非常に勝れたものであるといふことを固く信じて居られました。それで聖人は最勝の經たる法華經が最勝の國たる日本國に弘まり、此の日本國が中心となつて、やがて全世界に弘まる時の必ず來べきことを信じ、御自身が此の國に生れて法華經流布の魁となることに非常なる満足を感じて居られました。

天竺國をば月氏國と申すは佛の出現し給ふべき名なり。扶桑國をば日本國と申す、あに聖人出で給はざらむ。月は西より東に向へり。月氏の佛法の東へ流るべき相なり。日は東より西へ入る。日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相なり。——諫曉八幡鈔

とは聖人の確信を語られた御言葉であります。月は西から東へ向ふといふのは、毎月いつも新月は西の方の空に見え初むることをいつたのださうであります。吾が國の佛教は西方の印度から傳はつたのであるが、やがて吾が國が中心となつて此の佛教が世界に弘まる時には、一たび佛教の廢れ果てた印度へも、日本から佛教が傳はるに違ひないのであります。

斯ういふ大抱負をもつた日蓮聖人が、此の日本の佛教を一貫する所の立正安國の精神を高調せられたる『立正安國論』は、日本國中の凡ての人が是非とも讀まなければならぬものであります。

昭和十七年四月十五日印刷
昭和十七年四月二十日發行

立正安國論通釋

定價金貳圓參拾錢

著者

小林 一郎こばやし いちろう

發行者

東京市日本橋區小傳馬町一ノ一
加藤 莊一

印刷者

東京市牛込區早稻田鶴卷町二六〇
稻葉 元昭

發行所

東京市日本橋區小傳馬町一ノ一
協會員番號二二〇六一

慈 念 會

東京市神田區淡路二丁目九番地

酌給元 日本出版配給株式會社

943
16

終

